

『印度愛経文献考』周覽(2)¹⁾

異訳・異本・異版の問題を中心に

金 沢 篤

私は書物の蒐集家ではない。強いて名を付けるなら利用家とでもいうべきであろうか。どこかに珍本はないか、その所在を知りたいと常に願っている。そして知り得た珍本は、何か私の求めていることは出していないか、第一にその点を知ろうとする。そしてその書に拠って始めて知った事実を自由に発表することを許されるならば、私はそれを以て満足する。強いてその書物を自分のものにしたとは思わない²⁾。 森 銑三

元来、書物などは実生活には無用の長物であるから、読まぬ奴は読まぬし、信ぜぬ輩は信ぜぬのだから、少きを患ひともせず、多きを妨げずと悟つた方が温くて涼しからう。ところが、同じく書物でも珍本、稀覯書、豪華版と来ると、こいつは多きを恐れ、少ければ少いほど所有者は鼻を高くする。斯ういう病が高じると、世界に二冊しかない珍本を二冊とも買取つて一冊は焼捨ててしまはねば気がすまなくなつて来る³⁾。 辰野 隆

はじめに

資料を集める傍ら、それらを読み、書き継ぐという作業を開始してから半年余りが過ぎた。その最初の成果を送り出してからも既に四ヶ月、毎日のように新たな資料が届き、読み、解き、書くという作業には休みも終わりもないのである。手にした限られた資料から導き出された結論は、日々新たな資料によって検証され、更新される。誤記は言うまでもなく、誤った推定、誤った結論は避け難い、せめてそれらを訂正する労だけは惜しむまい。したがって、前稿の続篇としての本稿の役割は、前稿の訂正と言うべきだろうか。

馴れない発禁本や地下本の世界に敢えて乗り出した筆者ではあるが、作業そのものとしては筆者がこれまで続けてきたインド学研究と何ら変わるところはない。文献を集め、解説し、それを総合し、その成果を記すということである。先行研究に目を通し、それらを批判的に継承して新たな知見を付加する、ただそれ

だけである。インドの文献を相手に展開する作業の場合も、資料のあるなしから始めて、万事思うに任せない。どんなに細心の注意を払おうと、誤解・誤記・誤植は容赦なく入り込んでくるし、遭遇や発見に一喜一憂を重ねてきたというのが偽らざるところである。ピンを立てては倒し、城を築いては壊しの連続である。最近の百年にも満たない時代に関わるだけの「わが国に於けるカーマ・シャーストラ/インド性愛学の受容史」研究の場合、極論するならば、その事情は釈尊在世時のインドの思想状況の探究の場合と基本的にはほとんど変わるところはないのである。とはいえ、筆者が今回目指す前者は、未だ完結しておらず、受容史そのものに直接的に関与した人物たちが今もなお生きているという点で、後者とは決定的に違うと言うべきかも知れない。文献に記されなかったディテールは、時にはそうした生ける証人たちの生きた記憶と語りによって十分に補正し得るのである。また文献資料にしてもその数量は夥しいものがあり、研究者を幾様もの事情から悩ますことになる。公的なもののみならず私的ドキュメントのようなものまでも考慮に入れると、作業はほとんど絶望的な困難を予想させる。まだ船出したばかりで、取り敢えずの成果報告、金沢²⁰⁰⁵]を終えたばかりの筆者は、途方に暮れて立ち竦むような思いに見舞われている。

そうした受容史の一翼を担った当事者にして、いわゆる「軟派文献」通の猛者たちによる、自身のコレクションなどに基づく「書誌学的な成果」はこれまでも少なからず報告されている。広大な文献の海にこぎ出してたかだか半年ほどの筆者如きが貢献し得るところなどあるようにも思えないのであるが、筆者の今回の試みになにがしかの意味があるとすれば、それは「インド性愛学/カーマ・シャーストラ文献」に研究対象を明確に限定した結果、それこそ大海のあちこちに散在しているだけでともすれば埋没してしまいそうなデータに光を当て、一つ処に集積し、その一つ一つを直に吟味することによってだろうと考える。「インド性愛学」では括れない文献資料に敢えて目を塞ぐことによって、さらに些細な細部にとことん拘ったならば、これまで見えなかったものが見えてくるかも知れない、というのが筆者の希望であった。そしてその希望は、第一回目の成果報告である金沢²⁰⁰⁵]を通じて、少しは叶えられたように思う。性愛学一般やその周辺に関しては、万事に通じているかのような先人たちは沢山いる筈である。が、筆者は『カーマ・ストラ』を中心とするインド性愛学文献の受容にだけ注目した、そしてその受容に関わる人物たちだけに関心を向けたのである。

わが国に於けるインド性愛学文献の受容史上どうしても見過ごしに出来ない人

物として、梅原北明と酒井潔といった二人の大立て者は別格として⁽⁴⁾、大隅為三、泉芳璟、竹内道之助、岩本裕、大場正史、阿能仁といった人物に筆者は特に気を配り、その業績を吟味・紹介した。わが国に於けるインド性愛学文献の受容を考える上で本質的に重要な役割を果たしたこれら六人に失礼ながら番号を付して並べてみて思うのだが、まさしくこの六人こそが、重要な役割を担っていたと思えてくる。　　の三人は、サンスクリット原典を扱うことの出来ない人物であり、　　の三人は、サンスクリット原典を直に扱える数少ない人物である。この他に、筆者は、外国語にも堪能で、かなり高度な文献操作の出来る、しかもサンスクリットにも通じていたかも知れない人物として黒貞輔氏、及びわが国に於けるインド性愛学文献の受容史上、最も輝かしい書物『インド古代性典集』の生みの親と言うべき医学博士の原三正氏に注目した。そしてこうした重要人物たちのうち、業績や生年などを含めて素性がやや明らかになっている梅原北明、酒井潔、大隅為三、泉芳璟、竹内道之助、岩本裕、大場正史、原三正といった各氏に対して、必ずしも著作の多くない阿能仁氏と黒貞輔氏という二人の謎めいた人物に特に気を引かれ、好意をもって注目した。また、何と言っても本邦最初の『カーマ・スートラ』の紹介者、未だ素顔の見えない大隅為三氏についても俄然好奇心が掻き立てられたのである。さらに、高名なインド学者である泉芳璟と岩本裕の両氏であるが、多くの業績によって今日なおかつ学界を裨益し続けている岩本裕氏に対して、あたかも忘れ去れたかの泉芳璟氏にスポットライトを当てることを敢えて最大の課題と考えた。実際、わが国に於けるインド性愛学文献の受容史にあつて泉芳璟氏が果たした役割は極めて大きいのであつた。サンスクリット原典からの本邦完全初訳『カーマ・スートラ』と『ラティ・ラハスヤ』、そして『アナンガ・ランガ』の序文、さらにわが国に於ける最初のインド性愛学研究書、『印度愛経文献考』の著者にして、種々の雑誌などを通じ、学者としてインド性愛学に関わる格調高い解説文を書いた。今日に至るまで実に夥しい数量のインド性愛学関連の文献が産み出されたが、泉芳璟氏によるサンスクリット原典よりの全訳『カーマ・スートラ』は、折々にあつて常に中心的な役割を演じてきたのである。後続の岩本裕訳『カーマ・スートラ』に脅かされ、取って代われんとした観もあるが、岩本裕訳も決して完訳ではないのであるから、泉芳璟訳の使命も尽きたわけではない。

筆者の本研究は、わが国が未曾有の大地震に襲われた大正十二年に刊行された泉芳璟訳『カーマ・スートラ』という一冊の書物の数奇な運命を跡づけんとを試み

と言い換えても過言ではない。以下の大きな枠組みを改めて確認した上で、『カーマ・スートラ』をめぐる上記の人々に注目し、それらの人々が如何にして書物を著し、如何にして書物と関わったかについて論じてみたい。そして発禁本や地下本の世界でも一つの重要な研究課題となる異本・異版の問題についても少しく論じてみたい。

《第一期》⁽⁵⁾

- T. 4(1915)大隅為三訳『カーマ・スートラ』(パートン⁽⁶⁾/ラメレス版)〔発禁〕
 T.12(1923)泉芳環訳『カーマ・スートラ』(梵語原典)〔発禁〕
 T.15(1926)泉芳環訳『ラティ・ラハスヤ』(梵語原典)〔発禁〕
 S. 3(1928)竹内道之助訳『アナンガ・ランガ』(パートン/リズー版)〔発禁〕
 S. 3(1928)泉芳環著『印度愛經文献考』(発禁)

《第二期》

- S.24(1949)岩本裕訳『カーマ・スートラ』(梵語原典)

《第三期》

- S.42(1967)大場正史訳『カーマ・スートラ』(パートン版)
 S.46(1971)阿能仁訳『ラティ・マンジャリー』(梵語原典)

『カーマ・スートラ』をめぐる人々(承前)

わが国に於けるインド性愛学文献の受容を考える際に重要なことは、それに関わった人々の間の結びつき、情報交換の仕組みに思いを致すことではないだろうか。組織だった学界のようなものが機能していたわけではない時代の、人目を公然とは憚る世界の秘められた書物への愛を秘かに育んだ人々の個人的営みの繋がりを把握することをおいてはならないように思われる。その為にも、やはり資料、書物である。あることが知れても容易には参照できないものばかりである。またないかも知れない資料を草の根を分けるようにして探し出す、本研究の作業の実質はほぼそれに尽きるのである。

[阿能仁氏について] 米沢 2002]の「書物趣味誌概観」でも取り上げられている(178頁)季刊『京古本や往来』誌第50号には、「珍書稀観画の神秘的探索」という誠に興味深い記事が載っている。書物愛好家が扱える誌面ゆえ面白くない記事などあり得ないのだが、筆者にはとびきりの記事だった。「梵字悉曇の『梵文法帖』写本、本稿でも一度ならず触れた 酒井潔の代表作『愛の魔術』、酒井 1929a]、密教系の稀観尊像画の「神秘的探索」と入手の話である。は奇跡的遭遇による入手、

は「透視」による探索&入手、は「陰形法」による入手の経緯が見事な筆致で描かれているのである。筆者も書物好きということでは人後に落ちないつもり、それらには較べるべきもないにしても、に類した奇縁は何度も経験している。だがやのような「神秘的探索」法があるなどとは実際夢にも思わなかった。先年、ヨーガ行者の自在力に関して、その存在を自明の前提として、論及したばかりの筆者ではあったが、今更ながら驚いた次第である。「透視」の能力を持つ者の事例にはしばしば遭遇するが、「陰形法」は、文字通り、魔法とか魔術と呼ぶべきものと理解される。呪文などを用いて、ある品物を、他の人の目から隠す、他者には見えなくする方法であるようだ。最近ネット・オークションが盛んだし、筆者自身も資料の収集にはそれを大いに活用している。オークションの終了までに、自分が目をつけた品物が他の人の関心を引かないように、秘かに祈る。最後まで他人の注目を浴びなければ、最低の価格で落札出来るのに、そういう思いは日常頻繁に経験するが、自分の都合のよいようには事はけって運ばないもので、結局「競り合い」という事態に突入していく。そして、最後には、本当に自分はそれを欲しているのか?と自問し、場合によっては、さっさと諦める。この「陰形術」が使えたらどんなにかいいだろうと思うのだが、お宝アイテムの獲得に実際それを使っておいでの方がいるのである。だが、今筆者がその「陰形法」で想起したのは、奇しくもそこに言及されている酒井^{1929a}の「第一部第二章妖術」で中心的に取り扱われている「愛の魔術」としての「隱身法」であり「隱身術」である。そして、その酒井潔氏のもう一つの有名な著作『降霊術』、酒井¹⁹³¹を併せて復刻した酒井^[2003]の第二巻目の末尾に収録されている「南方先生訪問記」の以下の記述である。

「話の切れ目を覗いて、漠然と先生[[] = 南方熊楠 : 筆者註 []]は心靈科学の奇怪なる現象を信じるやと聞いてみた。すると心靈現象ということはもちろん存在すると断言された。・・・<略>・・・わしなんかこうして、この部屋にジーと坐っていても、ちっとも淋しいとは思わぬ。昼でも夜でも、好きなときに、昔馴染みの娘でも後家さんでも、呼び出すことができる。・・・<略>・・・たとえばじゃネ、一つの粘菌の発見でもじゃ、わしのような完備した実験室も、道具も助手も持たない人間が、目に触れるものを片っ端から顕微鏡で覗くなんて面倒なことをしていたら、いつまでたっても一ツだって成功しやしないよ。だからわしは一種の靈感によって、これはと思う物を採集して来る。するとメッタに的はずれぬ。たとえ目的の物はなくとも、何か他の発見がある。わしは無駄足を踏まない。また吾輩が旅行から帰るとき、汽船が田辺か

ら数丁のところまで来ると、家で何も知らず寝ている妻の耳に、平常通りのわしの声で、今帰ったとはっきり聞きとれる。そこで妻は戸を開けて待っているのじゃ。こんなことくらいはちょっと修養ができて人間なら、誰にでもできる心靈現象じゃ。(酒井 2003] 369-370頁)

まるで先のエッセイの著者、村井市郎氏は、この酒井氏の伝える南方熊楠翁を地でいくようではないか。この奇妙なエッセイは、その「密教図像学会員、日本民族音楽学会員」であられる村井市郎氏ご自身のご好意で参照し得たものだが、実は、この村井市郎氏こそ、筆者が先の論文、金沢 2005]で、ひととき高く評価し、紹介した『ラティ・マンジャリー』の和訳者の阿能仁氏であった。その名前「阿能仁」の読みは、文字通り「アノニム」であったことも、村井氏よりやはり御恵授いただいた垂涎の稀観本『ラティマンジャリー』、阿能 1972]の美しいローマ字(とデーヴァナーガリー文字)で印刷された扉で知れた。そこには、“Jayadeva/Ratimañjarī /AnoNym/Otsuka-Yakuho”とある。なぜ筆者が「陰形法」の話わざわざ持ち出したのかと言うと、そうした術は誰にでもやすやす出来るわけではないが、自らの著述という作業を「匿名」の下で遂行することは、言ってみれば、いわば誰でも簡単に出来る「隠身術/法」や「陰形法」なのではないのか、と尝试してみたからである。インド性愛学文献等の周辺で活動し、物言いを重ねてきた者たちの中には、この手軽な「隠身法」や「陰形法」の使い手がしばしば登場するのである。『ラティ・マンジャリー』のサンスクリット原典よりの見事な和訳者である阿能仁氏がまさしくそのような人であった。金沢 2005]を書くために、阿能仁 1972]とその著訳者である阿能仁氏の素性を求めて、筆者は珍しく重たい腰を上げ、めったにしないようなアクションを幾つか起しさえした⁽⁷⁾のであるが、結局総ては徒勞に終わった。では、どうして阿能仁氏の「陰形法」を破ることが出来たのか？ それは、やはりまったくの偶然の所産である。

攻略すべき資料の一つ笠野馬太郎 1969]を読むべく、『えろちか』誌第4号を手にしたところ、大場正史氏の遺作「性語学辞典」が同誌創刊号以来連載されているのが目にとまった。その第四回目、大場 1969]には、ちょうど「カーマ・シャストラ」の項目があり、それにざっと目を走らせたところ、「もうひとつ、きわめて短いものではあるが、従来の性愛論を巧みに要約した性典『ラティマンジャリ』(ジャヤデーヴァ作、村井市郎訳『ゆまにて』誌、一九六六年二月刊に掲載)がある。・・・(163頁)との記述に遭遇し、愕然としたのである。金沢 2005]に於いても言及した阿能仁氏の英訳からの重訳「ラティマンジャリー」に関して、大場正

史氏は訳者名を筆者などの知る「阿能仁」ではなく、「村野市郎」と記しているのである。この大場氏が文字通り誤記しているのでないとするれば、大場氏は阿能仁＝村井市郎を告げていることになる。ならば、その村井市郎氏とは誰か？『ゆまにて』誌上の「ラティマンジャリー」の一般読者には、思いもかけない名前である。どこにもその旨は記載されていないのである。一方、大場正史氏は、「村井市郎」と言う。阿能仁氏の素性は、その分野の大家、大場正史氏には知れているのであろう。その結果としてのその記述と想像された。だが、筆者には「村井市郎」氏も馴染みのない名前である。とその時、「村井」という姓で、筆者には一人の人物が俄に想起されたのである。「村井麦秋」、そう、金沢[2005]にも掲げておいた『カーマ・ストラ』関連参考文献の中に、名前と論文名を出してはおいたが未攻略のあの村井麦秋[1959]「スマラディーピカー」について論じている論攷⁸⁾の著者たる村井麦秋氏である。その時点で、筆者は気にながらも、その掲載雑誌、『生心レポート』第26輯を参照出来ないままに、放置せざるを得なかった。未邦訳のインド性愛学文献「スマラ・ディーピカー」を扱っていることを明示するそのタイトルから、その著者はサンスクリットを操れる人物かも知れないとは思いつつも、時間等の制約から、追求を怠っていたものである。もしかしたら、大場正史氏が言う「村井市郎」とは、この「村井麦秋」かも知れないと、大塚[1969]のその記述を目にした時に筆者は思ったのである。わが国の性愛学史の上でも貴重なドキュメントである『生心レポート』全冊の復刻が為されており、その所蔵図書館もアクセス可能で閲覧可能であることを知った。また、河内音頭なるものについても全く知ることのなかった筆者であるが、村井市郎という人物が存在し、その人には『河内の音頭 いまむかし』という著書、村井市郎[1992]があることを知り、無駄かも知れないと思いつつも直ちに入手の手続きをした。そして夜が明けて、図書館に出向き、問題の村井麦秋[1959]を目の当たりにして、やはり愕然としたのであった。阿能仁氏の書きぶりを知っている筆者は、この村井麦秋と阿能仁は同一人物に違いないと確信した。また、復刻版の『生心レポート』第30輯の冒頭⁹⁾に、1961年4月23日に開催された日本生活心理学会関西研究会の折の記念写真と参加メンバー全員の寄せ書きが掲載されていた。そしてそこには会長である有名な高橋鐵氏のサインと並んで、「村井市郎」の文字があったのである。村井市郎＝村井麦秋、そして村井麦秋＝阿能仁、その結果大塚[1969]による阿能仁＝村井市郎に得心がいったのである。文献学、書誌学的な観点よりすればその事実でもはや十分である。が、わが国に於けるインド性愛学文献の受容史の樹立を目指した本研究の立

場よりするならば、この「村井市郎」が、存命していることが確実な河内音頭の「村井市郎」と同一人物か別人かは重要な意味を持つてくる。後者の村井市郎氏は、大阪大学理学部卒、長らく大阪府立天王寺高校の数学の先生をされたとネット上に掲げられた「プロフィール」にはある。インド性愛学との接点は見いだせない。その村井市郎氏の著作『河内の音頭 いまむかし』を直に参照してみれば、さらに情報が得られると思われたが、その本が届くのを待てない筆者は、その村井市郎氏のご自宅へ電話することになった。そして電話口に出た村井市郎夫人の口より筆者の推定のすべてが正しいことが裏付けられたのである。村井市郎氏が、村井麦秋であり、阿能仁であること、氏が、大正14年9月3日生まれの現在八十歳であること、目下急病で入院中であることが、告げられたのであった。

数日後、注文した村井市郎著『河内の音頭 いまむかし』が届いた。その巻末には既にネット上で馴染みの著者村井市郎氏の写真と共に、氏のプロフィールや業績が記載されていたのである⁽¹⁰⁾。

[黒貞輔氏について] 筆者が黒貞輔氏に注目したのは金沢 2005]にも再三言及したように黒貞輔 1932a]の細密な記述ぶりによってである。同書の巻頭に、『アナンガ・ランガ』のサンスクリット原典の扉の写真が掲載されていたこと、及び同書に泉 1923a] 1923b]に見られる泉芳 環 訳『カーマ・ストトラ』の冒頭部を批判的に改変した(改訳・異訳)と思いき部分訳が収録されていたこと、しかもその部分訳は他ではついぞ目にしたことのないものであったことの為である。当時、泉芳 環氏を除くと容易には入手し得なかった筈のサンスクリット原典に直に参究する者などあろう筈がなかったのである。そこから筆者は、実名でありそうもない「黒貞輔」が実は泉芳 環氏のもう一つの名前であったらとの他愛ない空想を抱いたのであるが、それと同一の『アナンガ・ランガ』サンスクリット原典の扉写真を掲げた泉 1929]を实見し、鈴木辰雄 1931]所載の「談奇作家見立番附」に東方の「大関」の《「カーマストラ」泉芳 環》に対し、西方の「前頭」の末下から三人目に《「珍書解題」の黒貞輔》を見出すに及んで、この二人は別人であるとの一応の結論を見ていたのであった。だが、黒貞輔氏の「珍書解題」もいかなるものであるかは知れないままに、金沢 2005]では黒貞輔氏に関しては課題を先送りしたというわけである。何度も言うように、とにかくこの分野の資料は、書物にしても雑誌にしても「発禁処分」の対象になったものも多く、特定の会員にのみ頒布された今日では稀観書になっているものばかりで、参照するものなかなか困難を極めるのである。

だが、有難いことに、丹念に資料を漁り、資料を読み解くことによって、この黒貞輔氏の「珍書解題」とは有名な『デカメロン』誌に連載された黒貞輔 [1931-32]、黒貞輔氏による「世界珍書解題」であることが判明した⁽¹¹⁾。また、ネット上で参照し得た黒貞輔 [1932] に対する以下のような貴重な広告文を参照し得、氏がその分野で「忽然として現はれた斯界の彗星的存在」であることも知れた。『デカメロン』誌も古書市場には流通していないこともないが、一冊一冊が高価でなかなか手が出ないのである。だが、何とかそれを所蔵している図書館に出向いて、ようやくその黒貞輔氏の「世界珍書解題」を実見することが出来た。

黒貞輔氏と泉芳 環氏は明らかに別人である。また、黒氏のサンスクリットの使用に独自性が見られるとした筆者の先の見解は、修正が必要となった。黒氏は、泉芳 環氏の丹念な読者と言うべきである。後で詳しく触れるが、他者によっては活用されなかった泉芳 環氏の「改訳」を踏まえての記述であった。黒貞輔氏が実際にサンスクリットを解するかは不明だが、相当に学識のある人物のようである。以下の黒貞輔 [1932a] の刊行に際しての広告文からもそのことは知れる。

黒貞輔著『東洋愛慾文献』の広告文(風俗資料刊行会)

「世界的性慾教科書の解題」

「黒貞輔氏著 限定百七十部 非賣

(C)東洋愛慾文献 全一冊

体裁 縦六寸 横四寸四分 頁数約八十頁内外頗る美本

人間生活の基調をなす究極の要素は、食慾と性慾である。

現代の煩雑な文明と偽善的な道徳とに煩はされることのなかつた古代人は、性愛を神聖は快楽であると見て、その情熱と同情、如何にして女子を喜ばしむるべきかの方法を真面目に研究した。が、キリスト教の禁慾主義に災ひされた欧州では、如何に悔しがつてもこの研究的精神は中絶された儘で今日に至つてゐる。だから、その真の継承者はキリスト教国ではなくて、耶穌を知らない東洋の国々で、我々東洋人は少くともこの貼では大いに意を強うして可なりである。千一夜物語の英訳者パートン卿も云つてゐるやうに、女性に肉体的満足を與へる技巧と秘法の研究は、何と云つても東洋に於ける愛の書物であつて、それは博学な生理学者や社会的地位の高い名士や高僧等によつて書かれたものである。

かうした所謂、愛の書物の幾冊かは、既に日本にも翻訳紹介されて諸君の中には珍藏されてゐる人も少くあるまい。しかし、それは俗悪な軟文学者や

チャーナリストによつてなされたものが多く、真に良心的な紹介と翻訳とは実に寥寥たるものである。例へば、チャルダン・バルフューメと云ふべきを、バルヒューメと書ひて恬として艶笑学者のやうな顔をしてゐるのが御座るかと思へば、「精力若返り法」と呼ぶべきを英訳者の誤り通りに「老人若返り法」と称してゐる如き笑止千万なのが多いのである。

本書は、忽然として現はれた斯界の彗星的存在、黒貞輔氏が、あらゆる困難と闘ひつつ出来得る限原本に就いて解題した愛慾文献学上の新資料である。カーム・スートラ、アナンガ・ランガ、匂へる園、エル・キターブ等々の珍書を瞥見したことのない人は勿論、之等を所蔵してゐる愛書家研究家諸氏も、第一には愛慾文献学上の奇書として、第二には「新郎新婦の書」「村の炬火」或は「ヴェーシュヤンガナー・カルパ」「リザート・アルニーザ」等々の如き、未だ絶対に我国では紹介されてゐない珍籍の存在を知る参考書として、是非一本を座右に愛蔵されたいと思ふ。(七面堂氏の閑話究題XX文学館掲載の写真より判読)

また、原浩三の名前でも知られる名著『寢室の美学』の著者原比露志の「東洋愛慾文献覚え書き」、原比露志[1951]¹²⁾の中に、以下のような誠に興味深い記述がある。

「東洋艶笑文学概史と云うような題目にとつて、筆者は決して適任ではない。これは往年の酒井潔氏とその門下の黒貞輔氏の畑であり、また印度については故泉芳懐(ママ)氏辺りの、蘊蓄に俟つべきものだろう。だのに敢えてペンをとつたのは、余猶のない編輯の状況を察した上であり、咄嗟に然るべき執筆適任者を思いだし得なかつたからだと思つて頂きたい。(140頁)

この記述からは、問題の黒貞輔氏がかの性愛学文献派の雄として有名な酒井潔氏の門下であることが知れる。そしてある種の人々の間では、泉芳環氏と並び称されるほどの存在であったことが知れる。だが、この記述の真に意味深い点は、「酒井潔氏」に冠された「往年の」という限定辞であり、「泉芳懐(ママ)氏」に冠せられた「故」という限定辞ではないだろうか。最初の「往年の」が「酒井潔氏」と「その門下の黒貞輔氏」の両者にかかると思ふべきなのが、余計に感慨深い。戦後ようやく日本が復興の途に就こうという1951年のその時点で、酒井潔氏もその門下の黒貞輔氏も、もはや一線を退いていることを意味していると解釈するのは穿ち過ぎというものであろうか？ また、「故」といみじくも冠せられた泉芳環氏は、ご承知の通り、1947年に逝去して文字通り故人となっているのである。酒井潔氏は死を一年後に控えていた筈であるが、印象深い黒貞輔[1932a]を世に送り出したわれら

が黒貞輔氏は、どこへ行ったのであろうか？

黒貞輔 [1931-32] の掲載された『デカメロン』第九号の「後記」には、「黒貞輔氏の「世界珍書解題」は酒井氏の極力推奨されるもの、今後連載して行くつもりである。」とあり、黒貞輔 [1931-32] の掲載『デカメロン』誌巻頭には、以下のような挨拶文までもがある。

「明けましてお目出う！

昭和七年一月一日

デカメロン編集部

酒井 潔

小酒井恭二

朝香駿一郎

外山 潤

藤岡 光一⁽¹³⁾

黒 貞輔

竹内道之助」

そして、同誌「朝香生」と署名のある後記には「「世界珍書解題」は本年に入つて愈々黒氏とつときの文献を披露に及ぶさうである。」とある。また、『デカメロン』誌の「一週年記念号」に掲載の黒貞輔 [1931-32] の冒頭は以下の通りである。

「小生の「世界珍書解題」も回を重ねること茲に六回、こんな書名の羅列が果して受けるか、疑問であつた所が、「解題」は評判がいいと直接編輯者から聞かされた。悪い気もしないわけである。そこで、小生大いに気をよくして又解題を書く。大体、筆者の意は、内容が奇且つ妙、しかも一寸巧くやれば獲得出来る珍籍奇書の解題に在る。そう云ふ方の珍書が欲しかつたら、どしどし御注文を聞かして欲しい。出来るだけ諸君の求めてあるものを解題したいから。で、今回は「情愛文献類」(200頁)

そこで、黒氏はSchmid [1902//1922] を解題して、「印度と云ふ次に好色が来たら、先づパーチャヤナ、コーッココーカ、等々諸々の聖者がものされた、カーマシャーストラを思ひ出して頂き度い。これも、そのカーマ・シャーストラを材料とした「サンスクリット民族の性生活」の研究である。著者、リヒアルト・シュミット氏は、ヤシヨドハーラ註の完本カーマ・スートラをはじめ独語に移された梵語学の権威、印度愛経に関する総括的研究の成果を、この印度好色文献として出されたのである。目次を示すと、(202頁)として、

- 「1 サンスクリット好色文学
- 2 愛の人生三要項に於ける地位、及び其定義
- 3 ナーヤカ
- 4 ナーイカー
- 5 恋愛理学
- 6 チャンドラカラー
- 7 愛撫
- 8 恋愛技術(種々のアサナに就て)
- 9 求婚と結婚
- 10 妻女
- 11 他妻
- 12 娼婦
- 13 奥儀(以上)(202-203頁)

を示した後、

「大体、愛経自体と同じ体系である、「愛はあらゆる時代に於て、人間行動の……食慾に次いで……最も強き衝動である」と云ふ事から説き起して、印度の愛経文学史、書目、内容紹介、それから、プルシヤイタ、アウパリシユタカの説明に至るまで、印度の愛経を縦横に研究し、解明し尽して居る。殊に、梵語原文を随所に引用し、このラテン訳を付して居る等、文献として完全なものであると云へやう。本書のこの世に現はれたのは一九一一年、その後数版を重ねた。菊判、六九一頁から成る大著である。背クロス、カルトン装幀。ベルリン・パースドルフ書店の発行になる。(203頁)

と結んでいるのである。インド性愛学研究史のいわば不滅の金字塔たる Schmidt [1902//1922] は、今日でも専門の研究者たちによって再三参照され言及されているが、日本人でここまで触れたものは寡聞にして知らない。泉芳環氏や岩本裕氏によっても当然ながら言及され利用されているが、それを解題したものではない。同書が版を重ね、今日の多くの研究者が参照するのは1922年にベルリンで刊行されたその第三版である。黒貞輔氏も例外ではなくその第三版を用いて解題している。当然ながらその初版についても言及しているが、第三版には初版の刊行年が明記されてはいないのである。筆者の手元にもその第三版があるので認出来るが、辻 [1973] には、初版の刊行年は1902年とある⁽¹⁴⁾。が、黒氏によれば1901年である。一年の違いはいつでもよいようだが、やはり見過ごしには出来ない。同書の初版

刊行年に関しては、泉[1928f]にも触れられてはいないのである。黒氏は、なぜ1901年と紹介しているのか？ これは1922年刊行の第三版の巻頭に掲載されている初版時のSchmidtによる「序文」の日付が「1901年6月」となっていることからの推測によるものと思われる。「序文が1901年6月に書かれているのだから、刊行は1901年だろう」との単純な推測である。筆者も初版を見たく思って探したが、なかなか初版を所蔵しているところがない。しかたなく購入したが、それで驚いたのだが、初版と第三版は頁数が二百頁以上も違う⁽⁴⁵⁾。筆者が入手したのは初版の復刻本であるが、そこにも初版の刊行年が記載されていないのである。

その掲載誌「二月号後記」には、「連載中の黒氏の「珍書解題」も本号では愈々情愛文献の項に至つて更に脂が乗つて来た。序乍ら同氏を担任者として本誌の企図した「珍書相談部」もドシドシ御利用が願ひたい。」とあり、この後記の記載に呼応するようにして、同誌118頁には、「珍書相談部開設」の案内文が掲載されている。その中に黒氏に触れて以下のように言う。

「御相談は当分本誌連載「世界珍書解題」で明快な斬味を見せてゐる篤学黒貞輔氏が主として担当、懇切詳細に御答へ申上げます。(118頁)

黒貞輔[1931-32]掲載の「後記」には、マツウラとの署名の下、「黒氏の「珍書解題」は愈々「恋愛教範類」の項に入つて、読者に頁の不足を嘆ぜしめるだろうし、・・・」、黒貞輔[1931-32]掲載誌の「後記」には、やはりマツウラとの署名の下、「黒氏の「珍書解題」本号は読者のお好みに依て「英語の珍本」の懇篤な解説振り。」とある。また、「艶情読物特輯号」と歌った『デカメロン』誌第十六号所載の黒貞輔[1931-32]は、「と云ふ所で締切日が来た。何せ酒井潔氏と合同で歴大な「世界情愛文献解題」に取らり、世界中のありとあらゆる珍書奇籍を片つ端から蒐集、整理、解題して居るので落付いて居られないのである。(208頁)と、結ばれている。また同誌「後記」には、「黒貞輔氏の「東洋愛慾文献」と酒井氏の「仏蘭西艶芸文献」とは発行日を書き忘れましたが月末までには配本の予定です。」とある。

「黒貞輔氏の「東洋愛慾文献」とは、言うまでもなく、筆者も注目して金沢[2005]で紹介した黒貞輔[1932a]であるが、その広告が『デカメロン』誌の昭和七年四月号と五月号に大きく掲載されているのである。

『デカメロン』誌に見られる種々の黒貞輔関連の記述よりする限り、先に見た原比露菴[1951]の「酒井潔氏とその門下の黒貞輔氏」も得心がいくのである。筆者の泉芳環 = 黒貞輔説は束の間の幻影であったが、先に見た原比露菴[1951]の中に、黒貞輔氏が、酒井潔と並んで、われらが泉芳環氏と肩を並べていることは、筆者

の空想もあながち途方のないものでもなかったことを証しているようで、やや愉快である。

その後黒貞輔氏は、『デカメロン』誌の後続雑誌と言うべき『匂へる園』誌で「世界珍書解題」の続篇を連載しているようであるが、ある時期からはたとその消息が絶たれたような案配である。酒井潔と共同で作業が進められていたと言われる「世界情愛文献解題」はどうなったのであろうか⁽¹⁶⁾。そして黒貞輔氏とは実際いかなる人物であったのかという点に関しては、筆者は未だはっきりとした手がかりを掴めないでいるのである⁽¹⁷⁾。

[大隅為三氏について] この、我が国最初の『カーマ・スートラ』の和訳本、大隅 [1915a] については、もっともと言葉を費やすべきであろう。訳者の大隅為三氏についてももっとも触れたいところではあるが、残念ながら、今のところ筆者にはその生没年、主な著訳書などの他は、「美術評論家」という肩書きめいたものが知れているだけで、仔細は不明というのが実情である⁽¹⁸⁾。ただ、その人となり想像する参考までに、泉芳環氏の場合と同様、今回はその著訳書をリストアップしてみた。1881年生まれということがネット上で知れるが、泉芳環氏より三歳年長ということになる。『カーマ・スートラ』本邦初訳の栄誉を担う大隅 [1915a] 『婆羅門神学 愛經』は、氏にとってはほぼ最初の大著と言える。この歴史的訳書はサンスクリット原典からの直訳でなかったせいもあり、今日ではほとんど顧みられない。書物としての稀少性、書物としての高雅性だけが一部のマニアの口の端に上るだけで、訳そのものが問題にされることはほとんどない。八年後にサンスクリット原典よりの本邦初訳『カーマ・スートラ』、泉芳環 [1923a | 1923b] が刊行されてからは、いわばそれにとって代わられたということになる。そんな中で、発禁本蒐集家として名高い城市郎氏の城 [2004] の以下のような言及は、大隅 [1915a] の内容にまでも立ち入ったものとなっているという点で、誠に貴重なものと言うべきであろう。

「本邦初訳は大正四年刊、美術評論家大隅為三の『婆羅門神学愛經』です。英・仏訳からの重訳ですが、一例をあげると、ノ＜歓楽極まれル時等しく敗北して、男も女も共に剣を置くまで堪へよ。我に其幸福を告白し、我にその幸福を長からしめよと願ふ感動せる声を聞くを好む＞ノとなかなかのメイ訳です。二百部限定の自費出版、表紙総皮、本文二度刷りの豪華本が、当時の珍書屋仲間、愛書家をビックリさせました⁽¹⁹⁾が、直ちに発禁の厄にあって、それだ

けに珍重されているわけです。(258頁)

次いで、城氏は、続く泉 [1923a] [1923b] について簡単に紹介し、さらに、大隅訳文と泉芳 訳文などを直接的に比較したりしている。訳者の大隅氏と大隅 [1915a] に関して今日知れるところは、ここでの城氏の記述にほぼ尽きている。大隅氏の関与した書物は本稿末の『カーマ・ストラ』関連参考文献(改訂版・抜粋)にかなり網羅されていると考えるが、雑誌等に氏が寄稿した論攷の方は、例えば簡単には参照出来ない『犯罪科学』誌などには毎号のように寄稿しておられることからしても、相当数に上るものと想像される。また、筆者が手にして読めた例えば大隅 [1952] の末尾には「風俗研究家」と記されている点にも注意しておくべきであろう。

記念すべき大隅 [1915a] は「二百部限定の自費出版、表紙総皮、本文二度刷りの豪華本」ということであるが、わが国で刊行された總革装本について網羅的に記した佐々木 [1957] には、「愛経(カーマストラ) パツチャーナ大隅為三訳 自家版 T4・7・1」として、以下のように記されていて興味尽きないものがある。

「茶系肌色染、表紙平に図柄金箔押、背マウントの豪華版で、少雨珪 = 斎藤昌三：筆者註」の装幀十六傑(えぞ・まめほん)に選ばれている。本文と共に人気は高く、戦後になつて夢二の旧蔵本(蔵書票貼付)等が古書店に出て話題となつた。/参考であるが使用せし革に就いて『談奇党』(三)によれば総猫皮と記録されている⁽²⁰⁾が、猫ではあるまい。限定二百部。発禁。/他に白クロス装のものもあるといわれる。(15頁)

眺めているだけで時の経つのを忘れる『別冊太陽 発禁本』三部作の一つ米沢 [2002] には、そうした記念すべき珍書、大隅 [1915a] の二種類の異本の書影が掲げられている(186頁)し、城市 [2004] の別の箇所には、竹内 [1928] の広告チラシの「大隅本「カーマ・ストラ」が古本相場目下八十圓から百圓までの値を呼んである今日、本書(竹内 [1928] : 筆者註)も必ず意想外の相場を捲き起して、読書子の垂涎の対象となることだらう。・・・(263頁)」という貴重な紹介がある。

現物にはメッタにお目にかかれないこの大隅 [1915a] であるが、こうした種々まことしやかな記述の中にある例えば、「二百部限定」とが「限定二百部」をどのように受け止めればいいのかのだろうか? 筆者は幸い手にしているが、総革装の、タイトルなどの印刷された扉の裏には、“Justification du tirage/No.”と印刷された後に、手書きのインク文字で数字が書き込まれている、また、その下方には、やはり手書きのインク文字で、おそらくや訳者大隅為三氏の自筆サイン(T.Osumi)が記され

ているのである。だが、その限定番号を意味する筈の「数字」は、限定数を越えないと思われるのに、200を越えた数字であったりするのを目の当たりにし、あるいは、訳者の自筆サインはあるものの記番のない書物を実見したりすると、書物の実際の出版部数等は相当にいかがわしいものだと思ながら実感するのである。大隅^{1915a}]の総革装本は、少なくとも周知されているかの「二百部限定」ではなく、筆者に言わせれば、むしろ「三百部限定」の誤りではないだろうか？ そうした種々記述の中の「二百部」のネタ元は辿れないが、大隅^{1915a}]が私的に刊行される際に出た案内広告チラシなどにそう歌ってあるのであろう。だが、この手の書物の限定数は、稀少性を高めて販売を促進する為に、偽って少なめに告知するのが慣例のようである⁽²¹⁾。

書物の装幀などのことに関して言えばきりが無いが、以下には肝心の中身について少しく問題にしたい。本邦初訳の『カーマ・スートラ』はいったいどのようにして出来たのであろうか？

この問題に関しては、大隅氏自身が、その巻末に「本書は古代の風俗や宗教社会史を研究する学者の一助ともなれと英仏文から重訳したものである。(435頁)」と書いているのが、先ず何よりも重視されなければならない。そして、大隅為三氏の訳文と想定される種々原文を仔細に比較してみる必要がある。

次いで、この大隅氏の説明を踏まえて、原三正氏が次のように言われたのが重要である。

「邦訳は大正四年七月に、美術評論家大隅為三氏により、ラメレス仏訳本と英訳本からの重訳で『婆羅門神学愛經』が出た。(299頁)

原三正氏は、大隅氏の「英仏文から重訳」を、文字通りに、「英文と仏文から重訳」と解釈したのであるが、果たしてそうだろうか？⁽²²⁾ 確かに大隅氏訳の冒頭の「緒論(1頁~)は、ラメレス訳からの和訳である。その後の「英版の序文(58頁~)は、確かにラメレス訳にはないものであり、パートン版の序文と同内容のものである。したがって原三正氏は、それを、パートン版の英文からの和訳と理解したのである。だが、筆者は、大隅氏が依拠したのは、パートン等による英文ではなく、ラメレスに先立って刊行されたもう一つの仏訳、リズー訳、Liseux[1885]であると考えたい。大隅氏は、ラメレスによる仏訳とリズーによる仏訳を和訳した、と。大隅氏が和訳に際して、パートン版英訳とラメレスによる仏訳の両者を適宜使い分けたとはどうしても考えにくいのである。ラメレスによる仏訳が英訳からの重訳であることを知っているのであるから⁽²³⁾、その仏訳からの和訳は、後に泉芳璟氏

が指摘したように「重訳からのさらなる重訳」となる筈である。むしろラメレスやリズーがそうしたように、パートン版を和訳した筈であろう。だが、なぜ敢えて仏訳からの和訳を試みる必要があったのか、というと、なんてことはない。大隅氏が英語より仏語に堪能だったからではないか。大隅氏が、西洋文化史等についての情報をより豊富に含むラメレスの仏訳を取って底本としながら、その訳文を、パートン版の英訳により忠実なリズーによる仏訳で補ったと考えるべきであろう。大隅氏の「英仏文からの重訳」という微妙な表現はその事実を物語るものであろうと筆者は考えたいのである。

翻訳に求められるのは「原文に忠実な訳文」よりも「読みやすい訳文」と言うべきかも知れない。その意味で、本邦初訳の大隅 [1915a] と泉芳 環 [1923a | 1923b] は、しばしば比較して論じられる。訳者にとっても自分の翻訳が読者にどのように受け止められるか、どのように迎えられるか、大いに気にかかるものである。自ずと厳格な論理性を帯びざるを得ないサンスクリット文献の翻訳者の場合、いつもその点が気にかかるものである。逆に、先に見た大隅氏の言う「自由訳」に走れば、「原文からの直訳ではない」と譏りを受けるのである。泉芳 環『屍鬼二十五話』の場合がやはりそのような具合であったことは、筆者も金沢 [2005] に於いて言及もしたのである。ごく限られた読者を相手にしたものであろうと、大隅 [1915a] に続いてサンスクリット原典からの直訳を売りに刊行した泉芳 環 [1923a | 1923b] の場合、訳者の泉芳 環氏は、大隅訳と比較しての評判にはやはりナーヴァスにならざるを得なかった筈である。おそらくや、ほとんど(100パーセント)が泉芳 環氏による個人訳であったと思われるその泉芳 環 [1923a | 1923b] を、泉芳 環氏が敢えて大谷大学印度学会編訳として刊行したことの事情はいかかなものであろうか？ 訳語も必ずしも定まっていない未知の領域の難解なサンスクリット原典からの本邦初訳である。恐る恐るの手探り状態だったのではないか？ テキストの文言に厳密に密着することなくも、何人もある程度までは類推して理解することの可能な領域である。著者がそのテキストをどのような語調で書き進めているか、などという点もある意味では、一般読者にはどうでもよい点であったのかも知れない。

以下には、先に披瀝した大隅 [1915a] の翻訳の底本に関する筆者の想定を実証すべく検討してみたい。まずは、大隅 [1915a] の内容の概観と、各種想定し得る原書の内容の概観である。

大隈 1915a]

緒論(1-56頁)

(57-58頁)

<英版の序文>(58-64頁)

第一篇 総説

第二篇 都雅なる生活 性交の様式

第三篇 性交に先ち又は伴ふ愛撫と艶媚術に就て

第四篇 性交に就て

第五篇 性交の初めに方り如何にして自然の力を借るや

第六篇 結婚の種々なる方法及び習慣

第七篇 宮廷城裡

第八篇 妻に就て

第九篇 隣人の女との關係に就て

第十篇 恋の商い

<英版の緒言>(339-340頁)

結論(373-428頁)

目次(429-434頁)

Lamaresse[1891]

Introduction(pp.V-XXXI)

Titre I Pr liminaires du Kama - soutra

Titre II La Vie El gante

Titre III Des Caresses et Mignardises qui pr cèdent ou accompagnent

Titre IV Des Diff rentes Manières de se tenir et d Agir dans l Union Sexuelle

Titre V Comment,pour l Acte Sexuel,

Titre VI Des Diverses Sortes de Mariages

Titre VII Le Harem Royal

Titre VIII Devoirs des Epouses

Titre IX Rapports avec les Femmes des Autres

Titre X Courtage d Amour

Titre XI Cat chisme des Courtisanes

Conclusion Le Mysticisme Erotique dans l Antiquit

Burton&Arbuthnot[1883]

Preface(pp.1-5; pp.5-6)

< Introduction >(pp.7-10)

Part I

Part II

Part III

Part IV

Part V
 Part VI About Coutesans(pp.148-182)
 <Introductory Remarks>(pp.148-149)
 Part VII
 Concluding Remarks(pp.196-199)

Liseux[1885]²⁴⁾
 Avan-propos du Traducteur(pp.VII-VIII)
 Préface(pp.XI-XVII)
 Introduction(pp.XVIII-XXII)
 Note du Traducteur(pp.XXIII-XXV)
 Première Partie(pp.33-)
 Deuxième Partie(pp.69-)
 Troisième Partie(pp.125-)
 Quatrième Parti(pp.151-)
 Cinquième Parti(pp.165-)
 Sixième Partie(pp.205-)
 Septième Partie(pp.247-)
 Postface(pp.263-267)

.....

再三の繰り返しで恐縮だが、大隅 [1915a]は、基本的にはLamaïresse[1891]の和訳である。「緒論」と全十篇と「結論」から成るが、Lamaïresse[1891]のIntroductionが「緒論」、同じくConclusionが「結論」に相当する、そして、Lamaïresse[1891]のTitre XIが省略されているのである。代わりに、Burton & Arbuthnot[1883]のIntroductionが、「英版序文」の題辞を付けて、「緒論」と第一篇の間に挿入され、Burton&Arbuthnot[1883]のPart VIの初めに置かれているIntroductory Remarksが、「英版の緒言」の題辞を付けて、第十篇の初めに挿入されている、と言えるのである。ざっとこのように眺めてみると、先に見た大隅 [1915a] 巻末頁にある大隅氏の「英仏文から重訳した」ということがまさしく肯われ、原三正 [1979]などの原三正氏による解説文中の「ラメレス仏訳本と英訳本からの重訳」ということに到着するようである。大隅氏は、重訳本のLamaïresse[1891]とその仏訳の元になった直訳のBurton&Arbuthnot[1883]の何某かの版を底本としてその記念すべき大隅 [1915a] 『婆羅門神学 愛経』を作り出したことになる。周知の通りLamaïresse[1891]は、それに先立つBurton&Arbuthnot[1883]に対して遙かに忠実なもう一つの仏訳Liseux [1885]に比しても、「翻訳とは到底言い難いものであるが、オヴィディウスやカト

ウルスの如き作家の作品から類似の章句を引用していて、その点で興味がないではない。併し、この書は一八八八年にベナレスのヒンツォー・カーマ・シャーストラ学会で上梓され、今日学的に何等の価値なしとせられる最初の英訳に基づいて編纂したものであり、且つシュミット教授の指摘している如くラメレスは梵語の知識が余り十分でなかったことが明らかであるので、取扱に注意を要する。(岩本[1998] 351頁)とはいえ、だからこそ、ギリシア、ラテン文化に多大の関心を持つ大隅氏なればこそ、Lamaïresse[1891]を翻訳の底本とした上で、そこに欠けている情報をBurton&Arbuthnot[1883]で補完したのであろう、と考えられるのである。だが、果たしてそうだろうか？ 筆者は、大隅[1915a]と、Lamaïresse[1891]と、Burton&Arbuthnot[1883]と、手元にある幾種類かのLiseux[1885]を検分した結果、それに対して疑義を覚えたのである。大隅[1915a]の底本は、Lamaïresse[1891]であり、それを補完するのに用いたもう一つのテキストは、Burton&Arbuthnot[1883]ではなく、それに対する忠実な仏訳、Liseux[1885]ではないかと推理したのである。大隅[1915a]のその二箇所の前に置かれている「英版の序文(58頁)」「英版の緒言(339頁)」という題辞が気にかかったのである。確かに読者に対する説明として大隅氏がひねり出した題辞と考えても全然不思議ではない。だが、筆者には手元のLiseux[1885]のBibliothèque des Curieux[1921]²⁵⁾、すなわち、有名なLe Livre d'Amour de l'Orientの第三巻としてのLiseux[1885]の該当箇所の題辞としてある“Introduction de l'Édition Anglaise (p.13)と Avant-propos de l'Édition Anglaise (p.197)が気にかかったのである。大隅氏は、Burton&Arbuthnot[1883]で訳出する際に、読者に説明しようとして、その題辞をひねり出したのではなく、Liseux[1885]の該当箇所にあったフランス語による題辞をそのまま和訳しただけなのではないか、ということである。こう筆者に推理させたことには、もう一つ理由がある。先に掲げた大隅[1915a]の目次の中にも示しておいたのだが、「緒論」の1-58頁のうちの最後の二頁分57-58頁、「此等印度の書物と関係を有する作品にして、英語で書かれたるものには、……されど此問題を軽く知るに止まり、本書の与ふる注意を汚れたるもの、解す可らざるものとする人は憐れむべきものである。」は、実はLamaïresse[1891]のIntroductionにはないものであった。すなわち、その箇所は、Burton&Arbuthnot[1885]のPrefaceのpp.5-6に、Liseux[1885]のPrefaceのpp.10-11に相当する。その箇所に続いて、Introductionがあるのである。したがって、読者の便を図ってその題辞をひねり出して正確を期すのであるならば、緒言の末尾のその箇所にも、それなりの扱いをすべきなのではないか、ということな

のである。以上、舌足らずではあるが、大隅^{1915a}]の底本について取り敢えずの私見を述べた。

泉芳璟 訳『カーマ・スートラ』をめぐる諸問題

[泉芳璟 訳『カーマ・スートラ』の改訳(異訳)について] 本稿冒頭でも触れた如く、金沢²⁰⁰⁵]では、わが国に於ける『カーマ・スートラ』等のインド性愛学文献の受容史を大きく三期に分けてその概容を示し、その中心的役割を担った泉芳璟氏の著作なども網羅した。少なくとも泉芳璟氏の著作に関しては、資料的にもはや重要なものは出てこないだろう、とまで考えていたのであるが、意に反して、その後極めて重要と考えられる若干の資料を新たに入手した。その結果、若干の修正を施す必要を感じた。

泉芳璟氏は、大正十二年に泉^{1923a}]^{1923b}]を刊行した後、自作をどのように考えていたのであろうか？ それを窺う上で決定的な意味を持つ資料、泉^{1928b}]に遭遇した。『古今桃色草紙(發藻堂)創刊号に掲載された「愛經全巻の總説」という八頁たらずの小論がそれである。「本誌第三巻第一号に愛經に頭はれたる六十四藝と題して印度が已に二千年前に於て既にかんりの高級な文化的生活をなせし一斑を叙述した。」という書き出しからして奇妙なところのあるいわくつきの論文である。この原稿は、この論攷に先立つ泉^{1928a}]『変態資料(文芸資料編輯部)第三巻第一号に掲載された泉芳璟氏の論攷「愛經に頭はれたる六十四藝」の続篇として書かれたものようである。

[1928a] :「愛經に頭はれたる六十四藝」『變態資料』第三巻第一号(2.20)

[1928b] :「愛經全巻の總説」『古今桃色草紙』創刊号(7.1)發藻堂：東京

[1928c] :著『印度旅日記』發藻堂書院：東京(8.25)

[1928d] :「序」『愛人秘戯』(9.18) 竹内道之助 1928] 日本古医学資料センター[1975]

[1928e] :「印度愛經研究講座(一)」『變態黄表紙』創刊号(1928.12.25) 發藻堂書院：東京

[1928f] :著『印度愛經文献考』文献資料研究会：東京(10.28)

[1929] :「アナンガランガの梵文原典を解説す」『奇書』第二巻第二号(2.28)

[1931a] :共編『梵文金光明最勝王經』The Suvarṇaprabhāsaśūtra, Kyoto.

[1931b] :著『印度漫談』人文書院：京都

泉^{1928b}]の先に見た書き出しに続けて、泉芳璟氏は自らの和訳、泉^{1923a}]^{1923b}]に関しては、以下のように言う。

「印度学会の訳本は理解を主とするために章段の切り方が稍原本と違へてあるから、今これそ精密に原本に照して六十四項目を列挙して見る。これはそのまゝ愛經の第一品總説篇、第一章を読むことゝなり、且つ愛經の内容は如何

なるものであるかを提示することとなる。(35頁)

そして泉芳 璟氏は、『カーマ・スートラ』の冒頭部の改訳を、オリジナルの以下の に対して、以下の bのように提示しているのである。

【泉芳 璟】1923.10.15)

SktText&EnTr

「一 正義と財物と愛慾とに帰敬したてまつる。 [二]そはこの書に於て根本のものであるから。[三]この真理を証得せる学者たちに帰敬したてまつる。[四]その親縁であるから。[五] 創造主梵天は人類を造れる後、最初十萬章を以てこの三勢力(正義、財物、愛慾)の意義を説いた。(1-2頁)

b【泉芳 璟】1928.7.1)

SktText

「正義と財物と性愛に帰敬す。そはこの書に於て根本なるが故に。この真理を証得せる学匠たちに帰敬す。これその親縁なるが故に。蓋し創造主梵天は人類を造れる後、最初、十萬章を以て、その依つて立つべき人生三要項実現の法を説けり。(36頁)

【田村吉久】1928.12.31 『婆羅門神学』

「(一)正義と財寶と性愛とに帰依し奉る。(二)といふのは此の書に於ける根本なるが故である。(三)此の真理を証言せる学者達に帰敬し奉る。(四)其の親縁なるが故である。(五) 創造主たる梵天は、人類を造りし後、最初拾萬章を以て、この三つの勢力(乃ち正義、財寶、性愛)の意義を説かれた。(5頁)

【黒貞輔】1932.5.20 『東洋愛慾文献』

b

「正義と財物と性愛に帰敬す。そはこの書に於て根本なるが故に。この真理を証得せる学匠たちに帰敬す。これはその親縁なるが故に。蓋し創造主梵天は人類を造れる後、最初、十萬章を以て、その依つて立つべき人生三要項実現の法を説けり。(24頁)

【平野馨】1932.7.31 『婆羅門戒律』

「(一)正義と財寶と性愛とに帰依し奉る。(二)漸く言へるは此の書に於ける根本なるが故である。(三)此の真理を証言せる学者達に帰敬し奉る。(四)其は親縁なるが故なり。(五) 創造主たる梵天は、人類を造りし後、最初拾萬章を以て、この三つの勢力(乃ち正義、財寶、性愛)の意義を説かれ給ふ。(5頁)

さらに泉 [1928b] は、この bに続けて、原典の続きの改訳をさらに掲げているが、以下には旧訳と対比して示そう。また、黒貞輔 [1932a] 中に見られる該当個所の訳も引く。

<旧>「[六] 梵天の子マヌはその一部分即ち正義に関するものを別説し

た。・・・[一一 一九]・・・それにパブラの子パーブラヴィーヤの書は広漠に過ぎて学修に適しない。そこでこのカーマーストラ(性愛の学)は各項目を網羅して而も取り扱ひ易き一巻としたのである。(2-3頁)

<改>「梵天の子マヌはその一部分、即ち正義に関するものを別説せり。・・・而してパーブラヴィーヤの所説は広汎に過ぎて学修に適せず。これらの故を以てこの愛經(カーマーストラ)は一切の項目を簡單なる一巻となせるなり。(36頁)

<黒>「梵天の子マヌはその一部分、即ち正義に関するものを別説せり。・・・而してパーブラヴィーヤの所説は広汎に過ぎて学修に適せず。これらの故を以てこの愛經(カーマーストラ)は一切の項目を簡單なる一巻となせるなり。(24-25頁)

泉 1928b]にある改訳された訳文は、全巻の目次部を除くと、それで尽きている。だが、黒貞輔 1932a]には、さらに続けて、『カーマ・ーストラ』からの訳文が掲げられているので、今度はそれを泉芳璟氏の旧訳、泉 1923a]から引いて、以下に示そうと思う。

<旧>「一人はその寿を仮に百歳とし、これを三期に分割して以て三勢力を得ることに充るべきである。・・・(6頁)

<黒>「人はその寿をかりに百歳とし、これを三期に分割して以て三勢力の獲得に充つるべきである。・・・(25頁)

いかがであろうか？ 筆者は、泉 1923a I 1923b]の訳文をそのまま踏襲しているかのような田村[1928]や平野[1932]に対して、黒貞輔 1932a]に見られる「独自の訳文を踏まえて、金沢 2005]では、以下のように記したのであった。

「その訳は独自であるようでもあり、泉訳の焼き直しとでも言い得るようなものであった。それよりも何よりも、その書きぶりは・・・『印度愛經文献考』のそれとかなり重なりあうような面も顕著なのである。その一方で、サンスクリット語の書名や固有名詞などの取り扱いは、単なる猿真似を越えた自在さを感じさせるものがある。(413頁)

この結果、独自の翻訳文を示したかに見えた黒貞輔 1932a]が、黒氏自身の新たな解釈を示したものなどではなく、このほど新たに見出された泉 1928b]に含まれた、泉芳璟氏による改訳をそのまま継承したものであることが判明したのである。黒氏はサンスクリットを解すと解す必要がなくなったのである。泉芳璟氏は、『カーマ・ーストラ』冒頭部の改訳に次いで、『カーマ・ーストラ』全巻の目次立てを、

サンスクリット原典に即して全面的に改めて提示し、「今便宜上これを一目瞭然左に排列し、原典に省くところの品と章と項をその中に割り込ませると次のやうになる。印度学会本はこれによつて訂正して頂きたい。(36-37頁)と明言しているのである。

次いで泉芳 環氏は、泉芳 環 [1923a] [1923b] に関して総括して、以下のように率直に述べておられる。

「該訳本は大正十二年に出で、この方殆ど五星霜に垂んとする。該書は理解に便ならしむるを努むるに急にして原典に忠実ならざる箇所も幾分ある。訳語の妥当を欠くものもある。其の後本文を熟読し、註解を照校し、諸訳を参考するに随ひ、訳本の不備欠点を発見する所少くない。結局これは根柢的に改訳する必要がある。読者若しかの訳本を上掲の訳文に照されるならば訳語の相違少からざるを発見せらるゝであらう。(41頁)

そして、最後に泉芳 環氏は、以下のように述べてその論致を結んでいるのである。

「然し以上の改訳によりてやゝ原典に対しての忠実を加へたものと思ふ。本書は内務大臣から頒布を禁止した。然し訳者の立場からも公布を禁止したい。而して一層よき改訳をこれに代えたいものと思つてゐる。(41頁)

いかがであろうか？ 大正十二年に公にした『カーマ・スートラ』の和訳を、五年後の昭和三年に、いわば訳者自身が、公布を禁止したということである。したがって、それ以降に出版された泉芳 環訳『カーマ・スートラ』は、いずれも訳者自身の意向を反映したものではないということになる。戦後最初に復刻されたいわゆる〈再建社版〉は、泉芳 環氏没後の出版である。その巻末の「泉先生の靈に捧ぐ」からすると泉芳 環氏による正式な認可を受けたもののようにも見える。だが、今となつてはその真偽は不明である。それらは、すべて、訳者自身の意志を尊重せざる復刊であると見なすべきものかも知れない。だが、泉 [1928b] に見られる、自身の和訳出版に対する泉芳 環氏のこのような明確な意向は、後続する者たちによって十分に尊重されたとは言ひ難い。いや、黒貞輔 [1932a] 以外に、泉 [1928b] のメッセージに耳を傾けたものは一つとしてないように思われる。ひとつには、その泉 [1928b] の掲載誌『古今桃色草紙』がやはり相当にレアな雑誌であったことと関連していよう。また、泉芳 環氏自身、一度はある意味で封印することを決意したとはいえ、戦後、復刻しようという申し出に、もしかしたら渋々でも同意したのかも知れない。いずれにしても、そこに見え隠れするのはもはや著者自身の学

者としての真摯な意向などではなく、一度公にされた、いわば公共物を希求する大衆の我儘に支えられた売り手たちの我儘の世界と言うべきであろう⁽²⁶⁾。

以下には泉芳璟訳『カーマ・スートラ』の変遷を中心に、異本・異版について論じたい。金沢 2005 の【付記】に於いて簡単に報告したが、戦後に於ける泉 1923a [1923b] の正式な復刻は、岩本 1949]に先立つ《再建社版》の泉 1948b]である。また、泉芳璟訳『ラティ・ラハスヤ』泉 1926a]の戦後の最初の復刻は、もしかしたら泉 1948c]に先立つ、やはり《再建社版》の泉 1948a]かも知れない。また、金沢 2005]で犯した明かな誤りについて、一言確認しておくべきであろう。日本古医学資料センター[1975]に続いて、原三正編と明確に歌って人間の科学社より立派に復刻された『インド古代性典集』、原三正 1979]が刊行されたのである。そして、同社からその軽装普及版が初めて刊行されたのは1991年ではなく、1986年のことであった。確かに1991年にも同社から同じ普及版が出ているが、それは装幀を一新して刊行されたのである。今日店頭で容易に購入可能なのは、この原三正 [1991]である。

[泉芳璟訳『カーマ・スートラ』『ラティ・ラハスヤ』の異本・異版について]

そもそもこの「異本」とが「異版」というのは何であろうか？ ある「まとまった原稿」に対して正統な権利を有する者をいま仮に「著訳者」と呼ぶことにする。著訳者の合意に基づいて書物が刊行されるわけだが、その「書物」がいわば「正版」であり「正本」である。刊行された書物には、「印刷日」「発行日」、「著訳者」、刊行者たる「発行者(発行所)」、「印刷者(印刷所)」、「発売者(発売元)」等々が定まっており、いわゆる書物の奥付には、そうした種々のことがらが正しく記載されているのが普通である。著訳者の同意を得ることなく刊行された書物がいわゆる「海賊版」である。書物の本体はまた様々な部分から構成されている。「文字と挿絵」、「目次」、「表紙」、「函」等々。それらを扱うのは、インド学の分野に於ける写本研究と基本的にはなんら変わるところはないのである。著訳者にとっては自らが著訳したオリジナルこそを重視したい筈であるが、後続する者には、その異本・異版のすべてを受け入れた上で、適宜自らの用途と目的に活用することになる。正本Aを求めても、それがどうしても得られない場合、A(V)で代用する、何者かによって産み出されたるA(V)を甘んじて受け入れることになる。この泉芳璟訳『カーマ・スートラ』や『ラティ・ラハスヤ』に関して、果たしてどれほどの数の異本が作られ、異版が世に出回ったことか?⁽²⁷⁾ また、『カーマ・スートラ』に関して、重訳直訳

は問わず、これまでどれほどの種類の本がわが国に出回ったのであろうか?⁽²⁸⁾

		【Ksのスタイル】
泉 1923a I 1923b Ks	印度學會(10.15)	伏字&別刷
泉 1923a I 1923b Ks(V)	印度學會(10.15)	伏字&別刷
柴田茂 1924 Ks	印度文學研究會?(5.8)	伏字省略? ⁽²⁹⁾
泉 1926a Rr	印度文學研究會(9.15)	
泉 1926a Rr(V)	印度文學研究會(9.15)(11.28)	
泉 1926b Ks	???(2冊本)(10.13)	完訳 ⁽³⁰⁾
田村 1928 Ks	『娑羅門神學』	伏字省略
田村 1928 Ks(V)	『娑羅門神學』	伏字省略
平野 1932 Ks	『娑羅門戒律』	完訳
本間 1948 Ks		完訳
本間 1948 Ks(V)		完訳
山口 1948 Rr	カーマシヤストラ・ソサエテ(4.15)	
泉 1948a Rr	???(???)(再建社版)	
泉 1948b Ks	印度古典刊行會(5.10)(再建社版)	合冊
泉 1948c Rr	印度文學研究會(6.15)	
泉 1949 Ks	印度古典研究會(2.10)(若竹書院版)	合冊
日本古医学資料センター[1975 KsRr(講談社)		伏字&埋込 ⁽³¹⁾
原三正 1979 KsRr(函付)(人間の科学社)		伏字&埋込 ⁽³²⁾
原三正 1986a KsRr(函付)(人間の科学社/発売元:燦星社)		伏字&埋込
原三正 1986b KsRr(普及版)(人間の科学社)		伏字&埋込
原三正 1991a KsRr(普及版2)(人間の科学社)		伏字&埋込
原三正 1991b KsRr(函付)(燦星社)		伏字&埋込

以上が泉芳環訳『カーマ・スートラ』と『ラティ・ラハスヤ』に、直接的にかかわる諸本・諸版である。『カーマ・スートラ』に関しては、田村[1928]、平野[1932]、本間[1948]は、泉[1923a I 1923b]と同一とは言えないが、泉[1923a I 1923b]の訳語、訳文の特徴をはっきり帯びていると見なし得る。柴田茂[1924]と二冊本の泉[1926b]は筆者未見である。また、『ラティ・ラハスヤ』に関しては、山口[1948]を含め、訳文はいずれも泉[1926a]と大差ないものである。(V)を付したものが、その版のいわゆる「異本」と言うべきものである。泉芳環訳『カーマ・スートラ』関係では、泉[1923a I 1923b]、田村[1928]、本間[1948]に異本のあることを、筆者は確認した。また、泉芳環訳『ラティ・ラハスヤ』関係では、泉[1926a]に異本のあることを確認しているが、この二種の異本に対応するように、戦後の復刻版、泉[1948c]と山口[1948]がある。また、泉[1948a]の存在そのものは、未だ筆者は確

認出来ていない。日本古医学資料センター[1975] 尾原三正編の諸本に収録された泉芳環訳『カーマ・スートラ』も、基本的に泉[1923a]と泉[1923b]の正本からの復刻である。『ラティ・ラハスヤ』も、泉[1926a]の正本からの復刻である。正本と異本(偽本)は、中身や装幀や、また奥付の類いもほとんど同一と言うべきであるが、仔細に検分したならば、かなりの差異を持つ場合が多い。所有者は、それと指摘されなければ、自分の所有しているのが、異本(偽本)であることに気づかないことが普通である。以下には、それら諸本に関して、その相違点などを簡単に記しておきたい。これまでに色々指摘、取りざたされていたものを筆者なりにまとめたものであると諒解されたい。書物の全体に関して比較したのではなく、例えば店頭で購入する際の簡便な識別法という点を重視した。

[『カーマ・スートラ』の異本間の相違点～泉[1923a]と泉[1923a]Ⅴの比較⁽³³⁾]

	泉[1923a]	泉[1923a]Ⅴ
(函)	薄い	厚い
	表裏逆	正
表	花瓶&花	表 悉曇文字(kāmasatūṃ)
裏	悉曇文字(kāmasratūṃ)	裏 花瓶&花
印刷色	黒	印刷色 紺
背	「印度/古典 カーマスートラ 印度學會訳編(色と書体と大きさが違う)	
(本体)		
表紙	表 悉曇文字(kāmasratūṃ)	表 悉曇文字(kāmasatūṃ)
	裏 花瓶&花	裏 花瓶&花
	灰色クロス	紺色クロス
	文字色 金	文字色 金
背	「カーマスートラ 印度學會訳編(金(書体と配置が違う)	
	(上下の飾り模様) ギザギザ	
	紙質 薄い	紙質 厚い
内容(緒言1頁目本文6行目末尾)	「怪異の一たるを失」	「怪異の一たるを (失の字脱落)

[『ラティ・ラハスヤ』の異本間の相違点⁽³⁴⁾～泉[1926a]と泉[1926a]Ⅴの比較⁽³⁵⁾]

(1) 泉[1926a]Ⅴには以下の文が刷り込まれた紙片が挟み込まれている。

「一言申し述べます

この性愛秘義は、一名ラテイラハスヤといふカーマストラの姉妹篇です。これは

京都の印度學會の出版になるもので内容は確かに好いものと保証する次第で、私も珍しき貴書として推奨することに躊躇しないものです。でこの度印度學會の當事者から同好の士に頒つて貰いたいと依頼されましたので、私共では厘毛の利益きなく同好の士に頒つて参考としたらよいと思つて、頒布の労を採つた次第です。右一言挨拶を申上ます。」

(2) 両本共に、「緒言」に先立つ扉に、
「印度文學研究會講義の資料文献なるがゆゑに
講習者以外に頒布せず。且転載を禁ず。」
と印刷されている。

(3) 泉 1926a [V] には、その下に、「昭和貳年十一月廿八日」との紫色のインクによるゴム印が捺されている。(ゴム印のないものもある。)

(4) 泉 1926a [V] には、本の「地」が断裁されないままのものがある、挟み込みのないもの、ゴム印のないものがある。・・・これらは、製本されたが、出荷されなかったもの、在庫分であろうか。売れない/捌けないまま、在庫になり、それが、後年なんらかの形で古本市場に出回ったのではないか?⁽³⁶⁾

(5) 緒言(一頁から十頁)と翻訳本文(一頁から百十六頁)の間に目次(一頁)と《作者不明のエピグラフ》(デーヴァナーガリー文字による梵語四シュローカ&その和訳)の刷り込まれたその裏面(一頁)からなる一葉があるが、泉 [1926a [V]] には、その一葉の表裏面に対して一頁、二頁と通し頁が印刷されている。

(6) 泉 1926a [V] には、本来山吹色のカヴァーが附いていたと思われる。都内某古書店の店頭で筆者は実見した。そのカヴァーの背表紙には「ラティラハスヤ」という文字と「印度文學研究會」という文字が印刷されている。カヴァー表紙には、本体と同じ「Ratirahasya」が印刷されている。

	泉 1926a]	泉 1926a [V)
《緒言》	1 頁、2 行	
	ベナレス	ベレナス
	1 頁、7 行	
	Beitr ge	Beitr ge
	Erotik	(の活字が不調和に小さい) Frotik
	4 頁、6 行	
	見え	見え
	4 頁、11 行	
	ボンベイ	ボンベイ

《エビグラフ》頁、和訳部8行

ゞこれ・・・

だこれ・・・

[本間 1948]の異本について]

戦後に粗製濫造された仙花紙による『カーマ・スートラ』本のうち、この本間 [1948]が最も売れたものかも知れない。今日でも古本市場では最も頻繁に遭遇するものである。彩色されたカヴァー付きの本である。

(1) 表紙カヴァー

(2) 中表紙 :

(3) 扉 :

(4) はしがき(2頁) :

(5) 目次(3頁) :

(6) 中扉「東洋の聖典カーマスートラ」東洋の聖典カーマスートラ の二種類

(7) 本文(208頁) :

(8) 本文最終頁 : 「東洋の聖典カーマスートラ」東洋の聖典カーマスートラ の二種類

(9) 奥付 :

奥付の記載

昭和二十三年二月十日印刷

昭和二十三年二月十五日発行

昭和二十二年二月十日(初版)印刷

昭和二十四年四月十五日発行(改装版)

定価九拾円

定価百三十円

印刷者 中村勝治

<カーマスートラ>

印刷者 三共社 田村敬男

<カーマスートラ>

印刷者 田中幾一郎

<カーマスートラ>(ゴチ)目次第一編の活字潰れ

<カーマスートラ>

印刷者 三輪信理

<カーマスートラ> <カーマスートラ>

<カーマスートラ>

[田村 1928]、『婆羅門神学』の異本について]

(1) 田村 [1928]は、明らかに泉 [1923a]に基づいて作られている。泉 [1923a]のサンスクリット原文による伏せ字処理が為された箇所は省略されており、全体的に語句・語調が変えられている⁽³⁷⁾。

(2) 函入りのクロス装ハードカヴァーのしっかりした本であるが、表紙背の文字「婆羅門神学」と刷り込まれた部分に差異のある刊本を目にした。発禁本になった

ことが知られているが、押収されてもお生き残って、中身はほぼそのまま、装丁も若干変えての刊行がなされたようである。

(3) 函の違い：表と背に活字が印刷されている。両者ともに同じ文字&同じ図柄であるが、活字の大きさに違いがある。大きくゆったりしている(A)とやや小さくせせこましい印象を与える(B)がある。函の表の長方形の枠の中に印刷された「東京・印度文学研究会・発行」がアキなく上辺に接するような(A)に対して、(B)はかなりアキをとって印刷されている。背には、横二本線 婆羅門神学 印度文学研究会出版 横二本線が印刷されている。横二本の間隔の狭い(A)とやや広い(B)、「印度文学研究会出版」の字間のゆったりと広い(A)と狭く下に押し込められたような(B)がある。

(4) 本体はどちらもクロス装。色が茶色の(A)とベージュ/グレイの(B)がある。

(5) 本体背表紙は、上半分に、焦げ茶色の革の貼った(A)と赤茶色の革の貼った(B)、金文字で大きく「婆羅門神学」その下に小さい金文字で「印度文学研究会」と書かれた(A)と黒い横線二本 黒文字で小さめに「婆羅門神学」その下にさらに小さく右始まり二段に「印度文学」研究会 黒い横線二本の(B)がある。

(6) 本文は同じように見えるが、心なしか印刷活字が鮮明な(A)と不鮮明な(B)がある。

(7) 本文5頁の第一行目「第一章 全巻總説」の「總」の字の糸偏が鮮明な(A)と糸偏の上部がつぶれている(B)がある。

(8) 文言にも比較するとかなりの違いがある。(A)では、サンスクリット原典が有し、泉[1923a]が忠実に翻訳して有している、各章末尾の内容概説の一文が省略されている。(B)では、第一品第一章から第三品第三章まで、及び第五品第一章から同品第四章までには、その一文が見られる。他の章末尾は省略されている。

(9) (A)では、143頁の次が145頁となっており、頁付けに乱れがある。そして160頁と161頁の間に、空白で頁付けのない頁が挿入されている。その結果最終正しい頁付けの為されている(B)と、最終的に頁付けは一致した形で終わっている。

以上の諸点より判断するに、泉[1923a]の偽版と言うべき田村[1928]には、明らかに二種類の異本があるが、どちらが先に作られたものかは一概には言えない。それでも体裁的には不備もある(A)を先とすべきか？ 米沢[1999] 49頁の書影、及びその説明文等より判断すると、この田村[1928]にも、泉[1923b]に相当する「追録(正誤表) 66頁別添」があるようである。筆者の所有する二種類の田村[1928] (A)

(B)には、共に、それが付属していないこともあり、しかとは言えないが、米沢 [1999] 49頁に掲載されている函の写真からは、それが(A)であると判断出来る。古本市場では(A)が多く出回っているようである。

[阿能仁 1987] が伝える 泉 [1923a] [1923b] の異版について]

本稿を書き進めていた筆者は、阿能仁氏より送られた阿能仁 [1987] に衝撃を受けた。それは、阿能仁氏が「一応原本に忠実な復刻版」として紹介している、筆者未見の泉芳 環 訳『カーマ・スートラ』の異版⁽³⁸⁾に関する以下の記述のせいである。

「(1) 大正15年10月13日写記、発行者不詳の、「印度古典カーマスートラ」。青色インク孔版⁽³⁹⁾、菊判半紙袋綴じ仮洋装、全277頁二分冊本。第一冊は102頁まで、第二冊が103頁～277頁。表紙・背とも白無字紙装。本書は、原本の本文中で伏字代わりに梵文のままの箇所には、原本別刷「追加」中の該当する訳文が埋め込まれた完訳スタイルになっている。(3頁)

これは察するに、泉芳 環 訳『カーマ・スートラ』の異版として名高い『婆羅門戒律』すなわち平野 [1932] のプロトタイプと言うべきものである。因みに平野 [1932] は、「尚ほ、本書は徒らに頁数を増加させることを考へないで、何処までも内容本意で、一頁の字数も、四十五字詰、十四行とした。従つて、普通の書籍ならば、裕に四百頁を越えるものであるが、三百頁位に入れて了つた。頁数の少ないことは、決して内容を測る尺度にならないことも断つておく。」

との記述を含む一頁分の「訳序」の他、本体は276頁である。二分冊に分割するなら、第二品第九章までの第一分冊(100頁まで)と同品第十章以降の第二分冊(101頁から)となろうか? 阿能仁 [1987] が報告する異版(1)を是非とも検分してみたいものである。(未完)

【略号・『カーマ・スートラ』関連参考文献】(改訂版 抜粋⁽⁴⁰⁾)

Ar: Anaṅgaraṅga(愛壇)

Ks: Kamasūtra(愛經)

[1891/1900] Edited by Pandit Durgaprasad.NirnayaS/Bombay..

[1912] Edited by Sri Damodar Lal Goswami.KashiSanskritSeries 29/Varanasi.

[1934/1995] Edited by Madhavacharya.Lakshmivenkateshvara/Bombay.

[1964/1982] Edited by Devadatta Shastri.KashiSanskritSeries 29/Varanasi.

[1997] Edited by Ramanand Sharma.BitthaldasSanskritSeries 4/Varanasi.

[1999/2004] Edited by Prasada Nath Dwivedi.ChaukhambaSGM 299/Varanasi.

[2005] Edited by Radhvallabh Tripathi.Delhi.

Ps: Pañcasāyaka(五箭)

Rm: Ratimañjarī(愛華)

Rr: Ratirahasya(愛秘)

Rrp: Ratiratnapradīpikā(愛實燈明)

Rs: Ratiśāstra(愛論)

St(参考・研究文献)

Archer, W.G.

[1963] *The Kama Sutra of Vatsyayana*....., London.

Basu, B.N.

[1943/1945/1954] *Kama-sutra of Vatsyayana: The Hindu Art of Love*, Calcutta

Bibliothèque des Curieux

[1921] *Les Kama Sutra de Vatsyayana*...., Paris.

{Burton, Sir Richard & Arbuthnot, F.F.}

[1883] *The Kama Sutra of Vatsyayana, translated from the Sanscrit*, Cosmopoli.

Rau [1962] Archer [1963] Muirhead-Gould [1963]

[1885] *The Ananga Ranga (The Stage of Bodiless One) of Kalyana Malla, or the Hindu Art of Love (Ars amoris indica)* Cosmopoli [Ar]

Doniger, Wendy & Kakar, Sudhir

[2002] *Kamasutra: A New, Complete English Translation of the Sanskrit Text* ..., Oxford, etc.

Helpey.

[n.d.] *Le Kama Soutra de Vatsyayana... Nouvelle Edition*⁽⁴¹⁾...., Paris.

Iyengar, K. Rangaswami

[1921] *The Kāma-sūtra (or the Science of Love) of Srī Vātsyāyana*, Lafore.

[1922//2005]: *Ratiratnapradīpikā (Text with Transliteration and English Translation)* Mysore//Delhi.

Lamaresse, E.

[1891] *Theologie Hindoue: Le Kama Soutra, Regles de l'Amour de Vatsyayana (Morale des Brahmanes)* Paris.

Les Editions Georges-Anquetil

[1926] *Seule Edition Complète et Non Expurgée des Kama Sutra de Vatsyayana... traduit par I. Liseux*, Paris.

Liseux, Isidore

[1885] *Le Kama Soutra de Vatsyayana: Manuel d'Erotologie Hindoue*...., Paris.

Bibliothèque des Curieux [1921] Helpey [n.d.] Les Editions Georges-Anquetil [1926]

[1886] *Ananga-Ranga: Traite Hindou de L'Amour Conjugal, Redige en Sanscrit par l'Archi-Poete Kalyana Malla, Traduit sur la Premiere Version Anglaise par Isidore Liseux* [Ar]

Muirhead-Gould, John

[1963/1970] *The Kama Sutra of Vatsyayana*....., London.

Mylius, Klaus

[1987/1999] *Vātsyāyana: Das Kāmasūtra*, Stuttgart.

Rau, Santha Rama

[1962/1991] *The Kama Sutra of Vatsyayana*....., New York.

Schmidt, Richard

[1897/1900] *Das Kāmasūtram des Vātsyāyana* ..., Leipzig.

[1902//1922] *Beiträge zur Indischen Erotik* ..., Leipzig/Berlin [St]

[1903] *Das Ratirahasyam: Die Indische Ars Amatoria*, Berlin [Rr]

[1927] *Kalyānamalla ś Anaṅgarāṅga*..., Lahore [Ar]

Upadhyaya, S.C.

[1961/1963] *Kama Sutra of Vatsyayana*, Bombay/Tokyo..

愛住三郎

[1952]: 「カストリ雑誌興亡史」秘版 艶本の研究 別冊人間探究 第一出版社: 東京

秋田昌美

[1994]: 著『性の猟奇モダン 日本変態研究往来』青弓社: 東京

阿能仁(村井市郎)〔村井麦秋〕<1925->

[1966]: 訳『ラティマンジャリー「愛華」 未公開天竺性典全訳』『ゆまにて』第一巻第二号

[1969-70]: 「ヤブユムとラマ教尊像」⁽⁴²⁾『庶民金融』大阪府貸金業協会: 大阪11月号~

[1971]: 訳註『インド古性典・全訳と解説 ラティマンジャリー(性愛華集)』『大塚葉報』

No.230-240

[1972]: 訳著『インド古性典「ラティマンジャリー<性愛華集>」全訳と解説』大塚葉報編集部: 鳴門

[1980]: 「魔山人翁と文献」『魔山人翁しのぶぐさ』大平書屋: 東京

[1987]: 「カーマストラ印度学会本の異本と異版」『北御所』第9号 藤原北御所書房: 京都

石川四司

[1952]: 編『秘版 艶本の研究 別冊人間探究』第一出版社: 東京

泉芳環 <1884-1947>

[1917]: 共編『梵蔵漢対照般若理趣經』智山勸学院: 京都<桐尾祥雲>

[1918]: 著『佛教地獄極樂論』法蔵館: 京都

[1919]: 共訳『梵漢対照新訳法華經』平楽寺書店: 京都<南條文雄>

[1922]: 共訳『梵語戯曲シャクンタラー』光壽會: 大連(1922.10)<江連政雄>

[1923a]: 印度学会訳編『印度古典 カーマストラ(性愛の學)』印度学会: 京都

[1923b]: 印度学会訳編『印度古典 カーマストラ(性愛の學)』の別冊付録

[1924]: 訳『カーリダーサの歌へる印度の自然』印度学会: 京都

[1926a]: 印度文学研究会訳『ラティラハスヤ(性愛秘義)』(9.15)

[1926b]: ?『印度古典カーマストラ』?(10.13)

[1927a]: 「佛典に現はれたる性慾生活」『變態資料』第二巻第一号(1.25)

[1927b]: 共訳『邦訳梵文入楞伽經』南條先生古稀記念祝賀会: 京都<南條文雄>

[1927c]: 「印度の醫方古典に現はれたる日常生活」『變態資料』第二巻第三号 <7>(4.25)

[1927d]: 訳『二十五鬼物語』国際文献刊行会: 東京(7.20)

- [1927e]: 「泥棒哲学 印度のある戯曲から」『變態資料』第二巻第六号<10>(7.25)
- [1927f]: 「世界珍書解題(四)ラティラハスヤ」『文藝市場』第三巻第八号(8.1)
- [1927g]: 「自殺とニルワーナ」『變態資料』第二巻第七号<11>(8.25)
- [1927h]: 「愛經と愛秘」『變態資料』第二巻第十号<14>(11.25)
- [1928a]: 「愛經に頭はれたる六十四藝」『變態資料』第三巻第一号<16>(2.20)
- [1928b]: 「愛經全巻の總説」『古今桃色草紙』創刊号(7.1)
- [1928c]: 著『印度旅日記』發藻堂書院:東京(8.25)
- [1928d]: 「序」『愛人秘戯』(9.18) 竹内道之助[1928] 日本古医学資料センター[1975]
- [1928e]: 「印度愛經研究講座(一)」『變態黄表紙』創刊号(1928.12.25) 發藻堂書院:東京
- [1928f]: 著『印度愛經文献考』文献資料研究会:東京(10.28)
- [1929]: 「アナンガラングの梵文原典を解説す」『奇書』第二巻第二号(2.28)
- [1931a]: 共編『梵文金光明最勝王經』The Suvarṇaprabhāsa-sūtra, Kyoto. <南條文雄>
- [1931b]: 著『印度漫談』人文書院:京都
- [1932a]: 他訳『国訳一切經 經集部12』大東出版社:東京
- [1932b]: 他訳『国訳一切經 經集部15』大東出版社:東京
- [1933]: 「印度の佛教經典は如何にして造られるか」『書物』創刊号 三笠書房:東京
- [1933-34]: 著『佛教文学史』(上)(下) 佛教年鑑社:東京
- [1934]: 訳『梵漢対照新訳金光明經』大雄閣:東京
- [1934-36]: 共編『梵文華嚴經(入法界品)』The Gandavyūhasūtra, Kyoto <鈴木大拙>.
- [1939]: 著『梵文無量壽經の研究』顯真学園:京都
- [1940]: 著『佛教文学の鑑賞』三省堂書店:東京
- [1941]: 著『地獄と極楽 来世思想の考察』法蔵館:東京&京都
- [1943]: 著『日本教学の諸問題 第二輯 護国思想と佛教』顯真学園出版部:京都
- [1944]: 著『入門サンスクリット』(現代語学叢書)三笠書房:東京
- [1948a]: 訳『ラティラハスヤ(性愛秘義)』再建社:東京
- [1948b]: 訳『性典 カーマストラ』再建社:東京
- [1948c]: 印度文学研究会訳『ラティラハスヤ(性愛秘義)』世界古典研究会:東京 日本古医学資料センター[1975] 原三正[1979] [1991]
- [1949]: 訳『世界の奇書 カーマストラ 印度性典』若竹書院:東京
- [1975a]: 印度学会訳編『印度古典 カーマストラ(性愛の学)』日本古医学資料センター[1975]
- [1975b]: 「序」『愛人秘戯』 日本古医学資料センター[1975]
- [1975c]: 印度文学研究会訳『ラティラハスヤ(性愛秘義)』日本古医学資料センター[1975]
- [1979a]: 印度学会訳編『印度古典 カーマストラ(性愛の学)』原三正[1979] [1991]
- [1979b]: 「序」『愛人秘戯』 原三正[1979] [1991]
- [1979c]: 印度文学研究会訳『ラティラハスヤ(性愛秘義)』原三正[1979] [1991]
- [1990]: 訳『月の王子:ナラ王物語』北宋社:東京
- [1991]: 訳『呪術の王国:憑鬼²⁵話』北宋社:東京
- 岩本裕<1910-1988>
- [1949]: 訳『完譯カーマ・ストラ』杜陵書院:東京

- [1959]: 訳「カーマ・ストトラ」⁽⁴³⁾『インド集』筑摩書房: 東京
- [1998]: 訳『完訳カーマ・ストトラ』平凡社: 東京
内田魯庵
- [1941]: 著『魯庵隨筆集(上・下巻)』改造社: 東京
空木恍太郎
- [1949]: 著『恋愛小説 紛失した娘』かりや書店: 京都 小山[1948]
馬屋原成男 <1908-1984 >
- [1952]: 著『日本文藝発禁史』⁽⁴⁴⁾創元社: 東京
梅原北明 <1899-1946 >(烏山朝太郎)
- [1929]: 著『秘戯指南』文芸市場社: 東京
- [1931a]: 訳述『恋愛術(上)』山東社: 東京(1.27)
- [1931b]: 訳述『恋愛術(上)』改訂版』山東社: 東京(2.15)
艶本研究刊行会
- [1959]: 編著『世界艶本大集成』緑園書房: 東京
大隅為三 <1881-1961 >
- [1915a]: 訳『婆羅門神学 愛経』(7)
- [1915b]: 共編『イシスとアフロジテ』国民美術協会: 東京(石井柏亭)
- [1921a]: 共著『西洋絵画小史 傑作と秘蔵の絵画』國光印刷出版部: 東京(小林萬吾)
- [1921b]: 著『ピュウニス・ド・シャヴンヌ(泰西名画家傳 第七)』日本美術学院: 東京(9)
- [1926]: 共編『古代外邦陶器図譜』洪洋社: 東京(岡田三郎助)
- [1927a]: 著『ギリシャの美術』⁽⁴⁵⁾アルス: 東京(1)
- [1927b]: 編『外邦工芸集成 金工木工之部』巧藝社: 東京(岡田三郎助)
- [1927c]: 訳『希臘美姫傳』⁽⁴⁶⁾国際文献刊行会: 東京(12.25)
- [1928-31]: 編著『万国図案大辞典』全二十一巻 国民図書: 東京(和田三造立案)(6)
- [1929]: 共編『李朝時代木工作品集』巧藝社: 東京(4)
- [1930a]: 著『滿蒙美観 東西交流の片影』中日文化協会: 大連(3)
- [1930b]: 「希臘の遊女」『犯罪科学』創刊号 武俠社: 東京(6)
- [1931]: 「ヴエーナスの神祭」『犯罪科学別巻 異状風俗資料研究号』武俠社: 東京(7.10)
- [1933]: 著『希臘古陶白地レキトス 希臘絵画の研究』東西図案研究会: 東京(11)
- [1935]: 共編『片多徳郎傑作画集』古今堂: 東京(岡田三郎助)(1)
- [1940]: 編『工芸図譜 岡田三郎助蒐集集』座右實刊行会: 東京(5)
- [1941]: 「美術と道德」『日本文化の性格』文録社: 東京
- [1942a]: 共編『画人 岡田三郎助』春鳥会: 東京(辻永)(11)
- [1942b]: 編刊『支那之民芸 北支』東京(12)
- [1952]: 「催淫の媒材について」⁽⁴⁷⁾『あまとりあ』第二巻第六号
- [1957]: 編著『古渡更紗』全六巻 美術出版社: 東京(和田三造)(3-10)
大場正史 <1914-1969 >
- [1961a]: 訳『アナンガ・ランガ』『薫園と愛壇』(世界セクシー文学全集別巻)新流社: 東京
- [1961b]: 「『アナンガランガ』解説」『薫園と愛壇』(世界セクシー文学全集別巻)新流社: 東京
- [1966-67]: 訳『パートン版 千夜一夜物語』全八巻 河出書房: 東京

[1967]: 訳『パートン版 カーマ・スートラ』河出書房: 東京

[1969]: 編・訳『性語学辞典 4 『えろちか』4

[1971/1997]: 訳『パートン版 カーマ・スートラ』角川書店: 東京
オカローウ

[1980]: 『広田さんとの三十七年』『魔山人翁しのぶぐさ』太平書屋: 東京
小野常德

[1972/1983]: 編『発禁図書館: 秘密コレクションの公開』KKベストセラーズ: 東京

[1973/1984]: 編『地下解禁本: 禁断のベストセラー』KKベストセラーズ: 東京
金沢篤

[2005]: 『『カーマ・スートラ』は如何に受容されたか? 『印度愛経文献考』周覧(1)』⁽⁴⁸⁾『駒
澤大学佛教学部論集』第36号

笠野馬太郎

[1954]: 編『戦後取締られた 風俗出版總目録(正・続)』近世庶民文化』第21-22号

[1969]: 『あのころのアングラ出版 1946~56年・セックスとエロチシズムの非公刊本總目
録』『えろちか』4

久保藤吉

[1951]: 編『あまとりあ 臨時増刊 世界性愛文学選集』(8.15)

[1952]: 編『あまとりあ 臨時増刊 続世界性愛文学選集』(1.15)

黒貞輔

[1931-32]: 『世界珍書解題』 ~ 『デカメロン』風俗資料刊行会: 東京 第九~十六号

[1932a]: 著『東洋愛慾文献』風俗資料刊行会: 東京(1932.5.20)

[1932b]: 『房内禁日考』『匂へる園』風俗資料刊行会: 東京 第三輯(1932.9)

[1932c]: 『潤色栄花娘(世界珍書解題・統一)』『匂へる園』風俗資料刊行会: 東京 第三輯
(1932.9)

[1933]: 『房内経』『匂へる園』風俗資料刊行会: 東京 第五輯(1933.1)

黒豹介

[1952]: 『艶笑について 一つの問題提起』『あまとりあ』第二巻第六号

古泉展也

[1927]: 『印度愛慾文献に於ける「爪痕」「齒痕」その他』『變態資料』第二巻第十号<14>(11.25)

小柴近夫

[1948]: 他訳『カマ・スートラ(愛経)』不二書房: 東京&大阪

小山元比古

[1948]: 『東洋の聖典 ラティラハスヤ』(コツカコーラ著) 苅谷書店: 京都 空木(1949)

斉藤夜居

[1969]: 著『大正昭和艶本資料の探究』芳賀書店: 東京

斎藤昌三(少雨莊)<1887-1961>

[1932//1980]: 著『現代筆禍文献大年表』(著作集 第2巻) 八潮書店: 東京

[1948]: 著『東亜軟書考』星光書院: 東京

酒井潔<1895-1952>

[1926a]: 『古代東洋性慾教科書研究(一)』『變態資料』創刊号(第一巻第一号)<1>(9.15)

- [1926b] : 「古代東洋性慾教科書研究(二)』『變態資料』第一卷第二号 <2>(10.25)
- [1926c] : 「古代東洋性慾教科書研究(三)』『變態資料』第一卷第四号 <4>(12.25)
- [1927a] : 「世界珍書解題(二)アナンガ・ランガ』『文藝市場』第三卷第七号(7.1)
- [1927b] : 「古代東洋性慾教科書研究』『文藝市場』第三卷第九号(10.1)
- [1929a] : 著『愛の魔術』国際文献刊行会 : 東京 酒井 2003]
- [1929b] : 著『らぶ・ひるたあ』文藝市場社 : 東京
- [1931] : 著『降霊魔術』春陽堂 : 東京 酒井 2003]
- [2003] : 著『悪魔学大全』学習研究社 : 東京
酒井潔・黒貞輔
- [193?] : 共著『世界稀観本解題(私的出版・黒貞輔)
相良武雄
- [1949] : 「快樂の園」⁽⁴⁹⁾『チャンス』創刊号 中央文庫 : 東京
佐々謙自
- [1930] : 訳『世界珍書解題』日本蒐癖家協会 : 東京
佐々木桔梗
- [1957] : 著『總革命の話』プレス・ヒブリオマーズ : 東京
柴田茂
- [1924] : 発行『愛經』印度文学研究会 : 東京
柴田俊夫
- [1948a] : 著(古典刊行協会) 『カーマーストラ 愛經』暁文書院 : 東京
- [1948b] : 著(古典刊行協会) 『アナンガ・ランガ 愛壇』暁文書院 : 東京
志摩房之助
- [1931] : 「最近軟派出版史』『談奇党』第三号
清水勝
- [1992] : 発行『別冊新文芸読本 性の文学』河出書房新社 : 東京
城市郎
- [1968] : 著『悪書のすすめ』山王書房 : 東京
- [1969] : 著『発禁本百年 書物に見る人間の自由』桃源社 : 東京
- [1993] : 著『性の発禁本』河出書房新社 : 東京
- [1994] : 著『性の発禁本2』河出書房新社 : 東京
- [1996] : 「わが所蔵する秘本リスト(抄)』『性の秘本』鈴木敏文 1996]
- [2004] : 著『定本 発禁本 書物とその周辺』平凡社 : 東京
鈴木辰雄
- [1931] : 編『談奇黨』第三号(好色文学受難録)⁵⁰ 洛西館 : 東京
鈴木敏文
- [1996] : 著『性の秘本』河出書房新社 : 東京
世界文学研究会
- [1931] : 編『印度性典(ラティラハスヤ)』世界文学叢書』第九卷(1931.9)
太平書屋
- [1980] : 編『魔山人翁しのぶぐさ』太平書屋 : 東京

高橋織

- [1947]: 著『性典研究(性愛術篇)』性科学資料刊行会:東京 世界文学研究会:東京
 [1987]: 編『生心りレポート』上・下・別冊 銀座書館:東京
 竹内道之助<1902-1981>
 [1928]: 訳『愛人秘戯』文芸資料研究会:東京(非売品) 原三正 1979【1991】
 [1930]: 訳『El ktav lois secretes de l'amour』風俗資料刊行会:東京(ポオル・ド・レグラ著【7】)
 [1930]: 訳『苦痛と快楽』風俗資料刊行会:東京
 [1933]: 訳『ドストエフスキイ研究』三笠書房:東京(アンドレ・ジイド他)
 田中於菟彌
 [1959]: 他『世界文学大系 月報17』⁽⁶¹⁾『インド集』筑摩書房:東京
 [1963]: 訳『鸚鵡七十話 インド風流譚』平凡社:東京
 [1967]: 著『インドの文学』明治書院:東京
 [1974]: 著『酔花集』春秋社:東京
 [1975]: 『インドの女性問題』世界の女性史15 インドサリーの女たち 評論社:東京
 [1980]: 『古代インドの色道指南書カーマストラ他』⁽⁶²⁾『東洋の奇書55冊』自由国民社:東京
 [1985]: 訳著『遊女の手引き クッターニー・マタ=遣手女の忠言』平河出版社:東京
 [1991]: 著『インド色好みの構造』春秋社:東京

谷口勇

- [2002]: 『大隅為三訳「サフォー」(『希臘美姫傳』所収)について』異文化のディスクール』文化書房博文社:東京

田村吉久

- [1928]: 編『婆羅門神学』印度文学研究会:東京

耽好同人

- [1931]: 『珍書屋征伐』談奇党 第三号

辻直四郎

- [1973]: 著『サンスクリット文学史』岩波書店:東京

日本古医学資料センター

- [1975]: 編『東洋性医学古典集成』日本古医学資料センター/講談社:東京

長谷川卓也

- [1969]: 著『カストリ文化』考』三一書房:東京

花町右門(三宅一朗)⁽⁶³⁾

- [1947]: 『印度性典 カアマスウトラ《愛経》⁽⁶⁴⁾』獵奇 新春特別号 文藝市場社:大阪

- [1949]: 訳『ガミアニ 他一篇』(ミュッセ作)三竹書房:東京

林宗宏

- [1973]: 編発行『えろちか⁴² エロス開拓者梅原北明の仕事』三崎書房:東京

原比露志(原浩三)

- [1930/1963]: 著『寢室の美学』風俗資料刊行会/厚文社:東京

- [1951]: 『東洋愛慾文献覚え書』あまとりあ 臨時増刊 世界性愛文学選集』

原三正

- [1972]: 『序』⁽⁶⁵⁾ 阿能 1972】

- [1979]: 編『復刻・インド古代性典集』人間の科学社:東京
- [1986a]: 編『カーマーストラ インド古代性典集』人間の科学社:東京
- [1986b]: 編『インド古代性典集』人間の科学社/燦星社:東京
- [1991a]: 編『カーマーストラ インド古代性典集』人間の科学社:東京(1986.5.10)
- [1991b]: 編『インド古代性典集』燦星社:東京
- 平野馨
- [1932]: 訳『婆羅門戒律(カーマーストラ)』平野書房:東京
- 巫山亭主人夢輒(皆川四郎?)⁵⁶⁾
- [1929]: 「性愛秘戯解説(一)~(三)」『稀漁』第一号~第三号
- 本間太郎
- [1948]: 訳『東洋の聖典 カーマーストラ』聖典研究會:京都
- 松戸淳(平野威馬雄)⁵⁷⁾
- [1952]: 訳『ダマダラガーブタ述作やりてのおしえ』あまとりあ 臨時増刊 続世界性愛文学選集』
- 松山俊太郎
- [1980-]: 「古代インド人のよそおい」⁵⁸⁾『化粧文化』No.3~
- [1992]: 著『インドのエロス 詩の語る愛欲の世界』白順社:東京
- 丸木佐土(秦豊吉)
- [1930]: 著『世界艶笑藝術』(性科学全集第三巻)武俠社:東京
- 三好洋介
- [1948]: 訳『東洋の愛の書 古代印度秘本 愛経(カアマ・ストラ)』望書房:東京
- 村上秀人
- [1949]: 編『インドの聖典 性愛経 カーマ・ストラ』萩書房:東京
- 村井市郎<1925->(村井麦秋)(阿能仁)
- [1990]: 「珍書稀観画の神秘的探索」『京古本や往来』第50号
- [1992]: 著『河内の音頭 いまむかし』八尾市役所市長公室広報課:八尾
- [2004]: 「珍書稀観画探究余聞」『京古本や往来』第100号
- 村井麦秋(村井市郎)(阿能仁)
- [1959]: 「印度古性典」スマラディーピカー(愛釈)に於ける交悦態位『生心リポート』第26輯
- 山口三郎
- [1948]: 訳『印度古典 性愛秘儀ラティラハスヤ』カーマーシャストラ・ソサイエテ:東京
- 山村進之助
- [1927]: 「東方奇譚 カーマーストラ」『性文学』性文学社:東京 第二巻第五号(1926.6)
- 山本明
- [1976/1998]: 著『カストリ雑誌研究 シンボルにみる風俗史』出版ニュース社/中央公論社:東京
- 湯原公浩
- [2003]: 編『別冊太陽 城市郎の発禁本人生』平凡社:東京
- 米沢嘉博
- [1999]: 構成『別冊太陽 発禁本 明治・大正・昭和・平成 城市郎コレクション』平凡社:東京

- [2001]: 構成『別冊太陽 発禁本 地下本の世界』平凡社:東京
 [2002]: 構成『別冊太陽 発禁本 主義・趣味・宗教』平凡社:東京
 渡部大修 <1902->
 [1971]: 著『愛書《インドのエロチシズム》』⁽⁵⁹⁾ 双葉社:東京

《註記》

- (1) 本稿は、金沢 2005]の続篇である。前篇同様内容的に重複するところもあるが、諒とされたい。前篇同様旧漢字の使用に関しては徹底を欠く。併せて諒とされたい。不本意ながら、諸般の厳しい制約の為註記を最小限に留めざるを得なかった。
- (2) 森銑三・柴田由曲著『書物』(岩波文庫 1997年) 34頁
- (3) 辰野隆著『忘れ得ぬ人々』(角川文庫 1950年) 所収『書狼書豚』より、169頁。なお同文については前掲『書物』の柴田由曲に言及がある。233頁参照。
- (4) 鈴木辰雄 1931]所載の「談奇作家見立番附」表には、東西の横綱にそれぞれ「秘義指南」の梅原北明、「らぶ・ひるたあ」の酒井潔があがっている。この番附は、清水[1992] 118頁にも再録されている。
- (5) 筆者はわが国に於けるインド性愛学文献の受容史を、大きく三期に分けている。現在に直結する第三期ではなしに、第一期、第二期に特に関心が向けられている。詳細は金沢 2005]443頁以降を参照。
- (6) 本研究でも「パートン版」とは、世界で最初に出た『カーマ・スートラ』の英訳テキストを意味して用いている。
- (7) 泉[1979]などの発行元である人間の科学社に電話をし、原三正氏を尋ねて倉敷の原家に電話をし、『大塚薬報』の編集部がある四国鳴門の大塚製薬に電話し、さらに一面識もない福岡久留米の阿理生氏宅まで電話をかけたのである。親切に色々御教示いただいた阿理生氏には心より感謝したい。
- (8) 高橋織 1987]34 - 836頁。村井麦秋氏のここに見られる著作態度は、阿能仁氏と同様、徹底的に文献に即した厳密で客観的な精神で貫かれている。Schmidt[1922]に依拠していることを明記し、「態位」研究では有名な先行する高橋織氏のもの(筆者は本研究の文献リストに未だ取り上げていない)への配慮なども行き届いたものと思われる。
- (9) 高橋織 1987]37頁。
- (10) 村井市郎[1992]巻末の著者プロフィールからは、阿能仁名義の業績として、阿能[1971]の他に、阿能[1969 - 70]があることが知れる。すなわち、村井市郎[1992]の読者は「阿能仁」が村井市郎氏のペンネームであることを知っていたことになる。ほどなくして、筆者は村井市郎氏より村井市郎[1990] 2004]などのコピー及び文字通りの稀観本、阿能[1972]を拝受した、次いで、本研究にとっても貴重な、阿能[1980] 1987]のコピーを拝受した。ご高齢でかつご病氣中にも拘わらず、筆者の不躰な質問等に対して氏並びに令夫人が示されたご厚情には心より感謝したい。村井先生の一日も早い御快癒をせつに念じ上げたい。なお、阿能[1972]の存在は、原三正[1979]などの原三正氏の「解説」より知ったが、この阿能[1972]は、米沢[2001]所載の、城市郎氏選の「発禁・地下本関連文献リスト」にも、きちんと記載されていた(199頁下段)。城市郎氏などのその道の大家たちには、周知の有名な著作であったようだ。また、この阿能[1972]に関しては、村井市郎氏より御教示いただいた太平書屋 1980]所載の太平書屋

主人浅川征一郎氏の「魔山人翁の手紙と狂吟」に以下のようにある。

「同四十七年、十一月末、大きな封筒に毛筆で宛名書きの書留便が魔山人先生から届けられた。明けてビックリ、阿能仁氏の御勞作『惹耶堤婆作印度古性典羅底曼惹哩性愛華集之全訳及解説』の御惠投であった。それに添えられた文面がまた振っている、録しおかざるべからずである。

十一月廿九日

作楽雅兄 魔山人

謹啓、秋深而貴台筆硯多祥愈々老練、半打秋

詞野趣満溢興味潤沢微笑読了多謝〃〃

我衰吟

松茸既虫喰 頓首有憂色

山神氣奄々 下口閉失涎

嚙尼吸吐羅(カーマストラ) 穴無我乱賀(アナンガランガ)

埵羅葉数矢(ラチラハスヤ)

是印度性典 更近加珍冊 埵滿夢舎利(ラチマンジャリ)

我友阿能仁 努力好著作 一部得分讓

呈貴兄共悦 幸乞愛読栄 頂礼魔山人 (83頁)

ここには、わが国のインド性愛学文献の受容に果たした趣味人たちの役割が如実に見てとれるように思われる。米沢 2002] 「戦前戦後を生きた趣味人たち」にも登場する(137頁)魔山人とは、広田政之進氏のことである。

魔山人翁の追悼文集たる太平書屋 1980 所載の阿能 1980]は、「阿能仁(村井市郎)」と署名されている。村井市郎氏の筆者への私信によれば、「又、筆名の阿能仁とは、本名は村井市郎なのだ、という事を初めて明らかにした」のが、この追悼文であったとのことである。阿能 1980]には、「ところで、翁と親しくご高誼願うこととなったのは、私がひと昔ほど前に始めた、インドの古性典「ラティマンジャリ(愛華)」の翻訳が、昭和四十七年に詳細な解説を付して、本邦で初めて一冊の本となって世に出たとき、たしか林美一氏のおことばがあつて、翁に一本を献じご高覧を願つて、たいへん喜んでいただいたのが機縁であつた。(41頁)とある。

- (11) 例えば、米沢 2001]には、「・・・『世界珍書解題(黒貞輔)など、解題・目録などは記事の定番となっていた。(153頁)とある。酒井 1927a]にも明かな通り、酒井潔にも同題の連載がある。なお『世界珍書解題』という有名な翻訳書、佐々[1930]に存在する。註(16)参照。

- (12) 表題からも想像される通り、この原比露志 1951]は、渦中の人ならではの味わい深い記述に満ちている。とにかく今は、「今日までこの地方を含めての全体的な研究を概述したものには丸木砂土氏のパウル・エングリツシュ著の「好色文学史」の訳述本「世界艶笑芸術(昭和五)の末尾の数章と黒貞輔氏の「東洋愛慾文献(昭和七) 泉芳懐(ママ)氏の「印度愛経文献考(昭和三)の数書を数える程度で、他には珍書解題目録本その他で個々の作品についての紹介を見得る程度に過ぎない。(140頁)を挙げておく。

- (13) この挨拶文よりする限り、藤岡光一氏と竹内道之助氏とは明らかに別人のように見え

る。だが、国会図書館のオンライン上の検索で知れるところよりするならば、竹内道之助＝藤岡光一とあるのである。このように、斯学に於ける筆名には、相当奇妙な理屈が支配しているようであり、注意を要する。三宅一朗&花町右門の例もある。註⁵³)を参照。

- (14) 岩本 1949 P67頁には、第一版1902年、第二版1911年、第三版1922年と明記されている。
- (15) 岩本 1949 P67頁には、第二版が「索引なし」ohne Indexとだけ記載されている。むろん岩本氏の言及されるのは、「六九一頁の大冊」である第三版である。第一版は何と「九七六頁の大冊」である。索引と巻末目次を合計して三三頁である。このSchmidtの大幅な改稿の経緯については別に論じる予定である。
- (16) 酒井潔・黒貞輔共著『世界稀覯本解題』というものの広告チラシが、やはり七面堂氏のホームページに掲載されている。これは黒貞輔氏個人の責任で出版される私的出版で、「百部だけ印刷したが、印刷しただけで未製本のままになってある」とある。インド性愛学関連の文献として、三大性典の他に、「クシェメンドラ「娼婦の愛読書」、ダーモーダラガプタ「使者教範」」が挙がっている。また、当時の私刊本の流通システムを示唆するものとして以下のような興味深い記述がある。
- 「従つて定価と云ふものはない、希望者には無代で進呈してもいいのだが、これでも一冊に就いて二三圓はかかつてあるだらうから、左の規約でホンの製本代だけを頂くことにしよう。

總布製 表紙文字無し 一圓五十銭
 總布製 背金文字入 二圓
 背革天金上製 三圓五十銭
 総革天金特製 五圓

この他に送費として約二十銭を加算して頂きたい。云ひ忘れたが本の形は新四六判で二百二十二頁である。但し右の内、なるべくなら表紙に文字のない總布本(一圓五十銭)の御申込みを希望する。革を使用した製本は十人以上の申込者がいない場合にはお断りするから、予めその旨御承知を願つておく。」

これによって、同一の本文中身に対して種々の異装本があることの原因が明確となるように思われる。その他にも興味深い記述もあるが、それに関しては別稿を期す。いずれにしてもここで宣伝されている書物が実際に流通したのかは不明である。米沢[2001]巻末の城市郎選「発禁・地下本関連文献リスト」にも出ていない。その書物について言及したのも寡聞にして知らない。

- (17) 黒貞輔氏のことを考えた時、氏と、大隅[1952]の掲載されたと同じ『あまとりあ』誌で遭遇した「艶笑」について過激に語る黒豹介(くる・ひょうすけ)氏の関係がやや気にかかる。黒豹介氏は戦前戦後にかけてかなりの数の訳書で知られる。
- (18) 例えば、志摩[1931]には、「復 = 梅原北明：筆者註」より以前に於ても、いろいろな秘密出版物を刊行した人間は沢山あつた。ノ神田神保町の阪本書店、弁護士白井鐵太郎氏、文学士の蘇武六郎氏、始めてカーマシャストラを日本に紹介した大隅為三氏、その他現存せる知名の作家で自作を友人に頒つた某士等、一々あげると際限はないが、エロ出版を組織的に、対社会的に、而も相当の年月に亘つて終始一貫した人間は殆ど

みない。(22頁)等と出てくる。

- (19) 有名な書誌学者斎藤昌三氏は、石川[1952]所載の「アンケート<私が初めて読んだ艶本>」に答えて、

「・・・明治が代つた大正二年に相対会に入会したのでした。それから間もなく大隅さんの「愛経」が出たのですが、頒価の五円には悩まされました。その頃の五円は今日の二千円位に当るでせう。といふのは、十円もあれば一ヶ月生活出来た時代ですから貧書生には一寸手が出せなかつた程です。然し良心的ないい性典だと感心しましたよ。」(67頁)と記している。また同じ石川[1952]所載の「談話会 艶本珍書出版の思い出」の中に以下のようなやりとりがあって興味深い。岡田とは「オランダ書房の岡田甫」、坂本とは「温故書屋主の坂本篤」、伊藤とは「粹古堂主の伊藤竹粹」である。

「斎藤 大隅為三氏の「愛経」が五円。

岡田 大正四年ぐらい。

斎藤 あの時分五円を出せる人は数えるほどしかなかつた。五円を出すには、普通の月給取は三月ぐらい小遣を貯めなければならぬ。

伊藤 その「愛経」が展覧会で千五百円で出ておりましたよ。今もう骨董本ですね。

岡田 装幀がいい。

斎藤 文章は硬苦しい。

坂本 フランス訳からの重訳ですから・・・

岡田 あれだけの装幀の本は、あれまでないでしょう。

斎藤 ない。あの後だつてないよ。(119頁)

- (20) 耽好同人[1931]には、「その点、古いところでは、大隅為三氏のカーマストロなど中々凝つたもので、表紙は猫の縷皮を用ひ、本文も鮮明な二度刷にして、当時の愛書家を驚嘆せしめ、今日の市価五十圓と称されるのも、我が出版史上特筆すべき記録をもつてゐるからに外ならない。(11頁)とある。筆者も手にするが、それが猫革かは判断つかない。

- (21) インド性愛学文献の書物に接していると、やたらとこの「限定版」に遭遇する。発行部数が限られていて、購買意欲をかき立てるものようである。大隅[1915a]の「限定二百部」に関しては、もうあちこちでお目にかかるが、果たして本当だろうか？ その間の出版事情を見事に語っているのが、耽好同人[1931]である。例えば小野[1987]には、「限定版部数はウソつき」と題して興味深いことが書かれている(37頁)が、この記事のネタ元は、耽好同人[1931]の「珍書屋のトリック」中の記述である(15-16頁)。そもそもある書物が何部印刷されたか？などは、一般読者には明らかにされない。限定版出版は、そのことを明記して、それがその全体の中の第何番目か、という点を売りにした出版である。希少価値のあるものだから、価格はかなり高くなる。売る方も買う方もその点を諒解するのである。この本は世の中に200冊しかない、そのうちの1冊を自分は所有しているのが嬉しいのである。限定版はなにか付加価値を持っている。その限定版とは別の普及版があって、中身(本文)は同じだがおまけは付いていない。例えば大隅[1915a]は限定版と言われている。また、竹内[1928]は400部限定である。発売の折のチラシとか広告でその限定部数は歌っていることが多い。手作りならともかくも印刷機にかけての大量生産の場合、番号を付してもどういう意味があるというのだから

うか? 購買者の自尊心をくすぐるだけで、その番号にはさして意味はないように思われる。筆者の所有する大隅 1915a]にも、大隅氏自身のサインがあり、手書きの番号が入っている。直筆サインは入っているものの、番号の入っていないものもある。筆者が手にとってみた国会図書館所蔵のものには番号はなかった。総革装三段マウントであるが、クロス装のものもあるとか。米沢 2002]には、書影が掲載されている(186頁)。

- (22) 本文、後で論じるように筆者は大隅 1915a]巻末の著者のことばの中の「英仏訳」を、原三正氏のように「英訳と仏訳」のように解したくない。どちらかと言うと「英訳に基づく仏訳」のように解したいのであるが、その場合の大隅為三氏の「英仏訳」という言葉の使い方に対して、原比露 1951]の「本書は昭和二年十二月、竹内道之助氏の英仏訳本からの邦訳が文藝資料研究会から発行され、直ちに発禁となったが、終戦後に古典刊行協会本他の刊行が公開されている。(142頁)中の「英仏訳本」も興味深い、こちらは単に「英訳本」の誤記ないし誤解である。筆者は、金沢 2005]137頁などにおいて、原三正氏の解釈を妥当と考えていた。金沢 2005]142頁24行参照。
- (23) とは言ってみたものの、手元のLamaire[1891]をざっと見る限り、その書が英訳からの重訳であることを明示する記述はないようである。
- (24) 残念ながら、Liseux[1885]のオリジナルは未見である。一応Les Editions Georges-Anqueti[1926]に基づく。したがって、Avant-proposには、1885年12月25日パリ I.L.との署名入りである。
- (25) 筆者のこの推定は、その「英版の序文」等に相当する題辞を有するBibliothèque des Curieux 版の初出年にかかっていると見える。大隅 1915a]よりも以前でなければならぬわけだが、初出年は残念ながら不明である。ネット上の検索では、少なくとも1913年版というものの存在は確認できている。また、1910年に出た同叢書の *L'Œuvre de Nicolas Chorier* の巻末の同叢書抜粋カタログには、12フランという定価と共に、既に記載されている。なお、Liseux[1885]オリジナルに、直接的にその題辞があるとは考えていない。
- (26) 書物に関しても造詣の深い内田魯庵の元来著作者と本屋とは全然立場を異にしてをる。著作者が著述を発表するは必ずしも収利の為めばかりではない。全然利益を考へない場合も屢々ある。が、本屋が出版するのは(ある特殊のものを別として)収利が唯一の目的である。勢ひ本屋は常に算盤を持つてが、著作者は往々算盤を忘れ、相互の立場が拮据する結果が両者の誤解ともなり反目ともなる場合があるのは少しも珍らしく無い。が、之は本屋が著作権者に対し横暴であるわけでも、又著作権者が軽蔑されてるわけも無い。個々の場合に就て云つたら本屋が余りに算盤を持ち過ぎる町人根性を露はにする事もあらうし、著作権者が余りに我儘過ぎ身勝手過ぎる文人氣質の自尊心を発揮する事もあらうが、要するに夫は彼我の立場の相違である。(内田[1941]112頁)が想起される。
- (27) 金沢 2005]頁77)で、筆者は小山[1948]の珍書ぶりを既に紹介した。小山元比古氏による『ラティ・ラハスヤ』の和訳本の末尾に、空木桃太郎という名前の作家の小説『紛失した娘』が収録されていたのであるが、その後、空木桃太郎の『恋愛小説 紛失した娘』という書物、すなわち空木 1949]を入手した。これはなんと、小山[1948]と同一の二

篇が収録されているのであるが、書名からも想像できる通り、その収録順が異なるのである。小山[1948]の場合、小山訳「ラティラハスヤ」が主で、空木の「紛失した娘」が従であったのに対して、空木[1949]の場合は、その逆、「紛失した娘」が主で「ラティラハスヤ」がおまけである。同一の出版社、苅谷書店からのものであるから、そのようなことが起こったこと自体は不思議でも何でも無いが、ただ、わが国の出版史の上でも、この類の事例はそうもないと思われるので、参考までに紹介してみた。なお、空木[1949]の発行所は、「かりや書店」と表記されている。表紙には、「恋愛小説 紛失した娘」と印刷されており、紺色の地に裸婦と薔薇2輪が描かれている。背表紙には「恋愛小説 紛失した娘 空木恍太郎」と印刷されており、裏表紙には、「かりや書店刊」という文字がある。空木[1949]所載の「紛失した娘」にはカラー刷りの挿絵頁が6葉挟み込まれている。小山[1948]奥付には、「訳者 小山元比古」とあるが、空木[1949]の奥付には、「著者 空木恍太郎 小山元比古」とある。とにかく小山[1948] 空木[1949]共に、とんでもない書物である。珍奇な異本と言うべきか、異版と言うべきか。

- (28) これに関して言えば、阿能仁[1987]に、「カーマストラ(愛経)は、・・・世界各地の言語で200件にも上るほど刊行され、本邦では大正4年以來40種近く出版された。(2頁)とあって、やはり衝撃を受けた。この「40種近く出版された」ことの内実を知りたいと思う。筆者は金沢[2005]本文では、「大隅[1915]から始まって、石山[1995]に至るまで、『カーマ・ストラ』の和訳は十八種類に上る。(433頁)と記したばかりである。
- (29) 筆者未見。梅原[1929]現代邦訳艶書解説史151頁によれば、「又、大正十三年五月八日、東京麻布斧町印度文学研究会から柴田茂と云ふ人の発行で、本書の抄訳本が出てゐる。性交篇と奥義篇が全滅と云つていゝ程の削除で、之れは泉師本を翻案したものである。」椛[1973]145頁参照。
- (30) これは、阿能[1987]3頁による。阿能仁氏は、「印度学会訳編『印度古典カーマストラ(泉芳環訳)』を踏まえた、「『印度学会訳』・・・または『泉芳環訳』ということを確認にした、一応原本に忠実な復刻版」として、合計6点を挙げておられる。その(1)が、この、筆者未見の2冊本である。阿能氏は「原本の本文中で伏字代わりに梵文のままの箇所には、原本別刷『追加』中の該当する訳文が埋め込まれた完訳スタイルになっている。(3頁)と説明しておられる。筆者もこのスタイルのことを踏まえて「完訳」と表記させていただいた。なお、同箇所(2)として、筆者が金沢[2005]384頁【付記2】中で、「これまで誰によっても報告されていない」と記した「再建社版」が、(3)が「竹書院版」との違いなどを明記した上でしっかりと挙げられている。ただし、阿能[1987]は、京都の北御所書房の古書目録の冒頭に掲げられた文章で、今日となつてはもはや容易に参照し得ないと考えられるので、筆者の重複のある記述も無意味ではあるまい。この貴重な[1987]の存在することを初めて筆者に示唆してくださったのは、地下本研究の権威、七面堂氏である。改めて氏にも感謝したい。
- (31) インドの古性典集を含む、講談社が発売元のこの豪華集成全体の編者は、太田典礼氏であるが、実質インドの古性典集の編者は明記されていないものの、原三正氏と言って差し支えないと考える。
- (32) この「復刻インド古代性典集(人間の科学社)には、巻末に「エロスの美: 附録・写真集」と称する原色インド細密画などが何葉か収録されている。同社刊の二種の廉価軽装版

ではこの部分はカットされている。また、ほぼ同体裁の燎星社版では、その部分が巻頭に移動させられている。原三正編のこの復刻版の諸版の詳しい出版事情は不明だが、本文部分はいずれの版も同一である。

- (33) この泉[1928a]に異本のあることは、筆者は七面堂氏のHPで知った。その後メールでご教示いただいた点は、本稿に反映させていただいたが、その際「このことはその筋の専門家の間では常識なのか?」と尋ねたところ、常識ではないが、既に何かの目録で読んだことがある。知る人ぞ知る。」とご教示をいただいた。筆者も実見して、仔細に比較してみたところ、かなり顕著な相違点が見つかった。附録[1928b]にも二様ある。金沢[2005]385頁参照。その後、別記する阿能仁=村井市郎氏よりの私信で、村井氏が「七、八年前」そのことを目録の冒頭に書いたことがあるとあった。このことに限らず、本研究で筆者が書き連ねていることは筆者にとっては未知なるものの発見の連続ではあるが、社会的に見てどれほどの意味があるかは不明である。先人の業績を横取りした形になっていることを深く畏れる。どの世界でもあることだと想像されるが、個人の業績をめぐる確執というのは避けがたいものようである。筆者は、したがって、可能な限り、同業の研究者に直接的に教示を仰ぐことを控えてきた。入手できた何某かの客観的データをめぐってつなぎ合わせ、推理して帰結できたことを記しているつもりである。例えば別記した阿能仁氏の正体なども、例えば大場正史氏は、明らかにその人物を村井市郎氏である承知しておられたのである。また筆者にはやはり謎の人物であった村井市郎氏も、ある人たちは、「ああ、あの村井氏ね。」と言うのであろう。としても、筆者も口を噤んでいることは出来ない。限られた時間などの制約の下で、知り得たことを書き連ねていくしかないであろう。なお、今回の泉[1923a]の正本・異本の相違比較に関しては、その後阿能仁氏であることが知れた村井市郎氏より御恵送いただいた阿能仁[1987]に詳細に論じられていた。七面堂氏が見たのは、この阿能仁[1987]であったと思われる。特に本の函や表紙を飾る悉曇文字に関しては、阿能仁氏の「作者の泉先生は装丁に少々凝ったつもりか、題字は古いグプタ文字スタイルを用い、Kāmasūtram(カマスートラン)と書くべきところを、書体の不調のため、デーヴァナーガリー文字や悉曇(したん)文字を見慣れている我々には、字間も空いていて、Kā ma sra tum(カマスラトゥン)と読めるものになってしまっている。異本ではその題字が、sra字の一画が欠落してsaになり、カマスアトゥンと読めるものになってしまっている。(2頁)と極めて的確に表現されている。村井市郎氏には、これら資料を御恵与いただいたことを含め、敬意と共に心よりの感謝の意を捧げたい。

- (34) 泉芳環訳『ラティ・ラハスヤ』すなわち泉[1926]に関しては、例えば艶本研究刊行会[1959]第四部『世界の性典』の「大正十五年十月、京都の印度学会から出た泉芳環氏訳の『ラティラハスヤ』菊判仮綴、本文は一一六頁、索引二一頁のものあり。/印度文学研究会というのからも、菊判仮綴一二五頁が出たという。所見のものには大正十五年九月の序あり、型態頁数など前記印度学会のものと同じで、頭書には印度文学研究会積となっていた。(389頁)によると、<印度学会本>と<印度文学研究会本>の二種類があるかのように読めるが、これは明らかに誤りである。大谷大学印度学会より邦訳『カーマ・スートラ』を刊行した泉芳環氏が、印度文学研究会の為に邦訳『ラティラハスヤ』を刊行した事態を掌握しない著者の混乱によるものである。筆者がここで改めて

問題にしているのは、印度文学研究会訳『ラティラハスヤ』、泉 1926 の異版についてである。金沢 2005【付記2】でも簡単に触れた、外装も内容もほぼ同一の異本間の差異に関してのものである。

(35) これに関しても既に金沢 2005 p85-384頁の【付記2】の中で簡単に言及している。参照のこと。

(36) この泉 1926a に関しては、オカ 1980 に興味深い記述がある。「出かけるまえに広田さん(広田政之進=魔山人:筆者註)は、ちょっとお待ちをといつて次の間にはいられ、しばらくして、表紙に『Ratihasya』とだけある二冊の本をご持参、われわれに下さった。いま自分の所持するものには、「この本岡さんへ贈る/昭和廿三年夏御来訪記念に/魔」と巻頭に朱筆でしるされてある。山沢さん(山沢英雄:筆者註)のも大体同文であろう。//この本は記者の緒言に、大正十五年九月十五日、本文最初に印度文学研究会訳とあるだけで、奥付も刊記も一切ないが、泉芳環氏訳であることは間違いあるまい。//自分は同氏訳の『カーマストラ』(大12)の別冊つきを所持していたので、大変嬉しかった。//この『ラティラハスヤ(性愛秘義)』(内題による)の出版については、広田さんが相当助力され、そのため若干冊を持っておられたものようだ。(23-24頁)

さらに泉 1926a に関連しては、やはり太平書屋 1980 に以下の如き飯島花月と飯島保作氏の広田魔山人宛書簡が掲載されている。

「広田政之進様

第二十一信(昭和2年10月13日付)

拝啓聖コツコーカの性愛秘義一本曩二御惠贈被下通読感服仕候唯梵文ヨリ直接訳故か訳文晦渋隠微二亘るの語多く頗る難解二苦しみ候得共大意は略諒解仕候代金拝送致すべく申上候処堅く御辞退之御厚意二甘んじ拝受致置候大隅氏愛経出版当時八同好者五七人相生じ加盟為致候得共今回八花岡氏の勸説効無かりしにや今以注文無之候由・・・飯島生(114頁)

広田魔山人氏が泉 1926a の出版に関与したこと、また泉 1926a の売れ行きが今ひとつ芳しくなく、その状況が、大隅 1915a の時を引き合いに出して問題にされていることの二点を確認しておくべきであろう。泉芳環訳の訳文の晦渋さが時に問題になることの一例としても重要な証言ではないか。この手の本の売れ行きは、その中身もさることながら、装丁が重要であることも証立てているように思われる。泉 1926a は、極めてシンプルなフランス装と言うべきものである。

(37) この田村 1928 等に関しては、城 2004 には、「このほか、いわゆる艶本時代の昭和初期には、偽版めいた『娑羅門神学』、『娑羅門戒律』の二冊が出ていますが、『娑羅門神学』は泉芳環訳の全くのヴァリエーションに過ぎず、『娑羅門戒律』=平野(1932)のこと:筆者註』はまたその引き写しです。(259頁)とある。「ヴァリエーション」にさらに「ヴァリエーション」があることは興味深い、それほどにその手の書物に対する需要があったということか?

(38) 原比露志 1930//1963 所載の「翻訳『好色文学』覚書」中に「四二、『カアマ・スウトラ』(愛経)」として、「印度の聖典、大正四年七月大隅為三氏訳の限定版出で、大正十二年十月大谷大学の泉芳環氏の直接訳完本が印度学会から発行され、其後十三年、昭和三

年の二回印度文学研究会と名乗る出版者から複版が出たと云ふ。(『1963』37頁)とある。ここで触られているのは、筆者未見の柴田茂¹⁹²⁴と田村¹⁹²⁸の二冊である。阿能仁氏の紹介される二冊本『カーマ・ストラ』(1926)は、頒布を目的としたものではなく、文字通りの「私家版」であろうか？

- (39) 「孔版」とは「画線部に印刷インクを浸透させるようになっている印刷版。謄写版・スクリーン印刷などに用いる。(『広辞苑 第五版』による)ということであるが、艶本研究刊行会¹⁹⁵⁹『卷末所載の「書物語彙」』によれば、「謄写版刷の本のことである。「とうしや本」とも言い、活字本に対して簡易で安物が多かつたので、古本屋辺りが目録で売る場合に体裁ぶつて云い出した昭和時代頃からの新造語であろう。(607頁)とある。
- (40) 金沢²⁰⁰⁵所載のものと同重複する部分もあるが最新の<改訂版>に基づいて、本稿の記述と直接的に関係するものだけを<抜粋>して掲載する。なお、同一年内の刊行が複数ある場合の刊行順を a、b、c、d 等の識別記号で表記する方式には限界があると考えられるが、次回からは、刊行年月までを数字で表記し、同一年月内になお複数ある場合のみ a、b、c、d 等の識別記号を使用することになるかも知れない。
- (41) 今日Liseux¹⁸⁸⁵の普及版として比較的容易に入手出来るものには、英語版序文の類は附いていない。Helpy と称する人物による Introduction が付されている。発行時の記載もない。
- (42) 同誌に10回に亘って連載。筆者未見。
- (43) 岩本¹⁹⁴⁹以降に訳者岩本裕氏によってなされた改訳の成果が反映された貴重な異訳だが、残念ながら部分訳に留まる。岩本¹⁹⁴⁹の復刻たる岩本¹⁹⁹⁸には、当然ながら反映されていない。
- (44) 本書、馬屋原¹⁹⁵²に泉芳環訳『カーマ・ストラ』について言及のあることを、古書市で立ち読みした城¹⁹⁶⁸で知った。駒澤大学教授でもあられたということで興味をもって早速に読んでみた。「従来性科学の研究書で発禁になつたもの」として、大隈^[1915]と泉^{1923a}、^{1923b} 等のあることを指摘した上で(133頁)、「三「カーマ・ストラ」は古典文化の研究書」と題して(138頁)以下のように興味深い記述が見られる。「・・・美術評論家大隅氏の『愛経』は・・・内容は、佛訳であつて、くだけで書いてあるので、読物としては興味があつとの評があつたが本来のカーマ・ストラの真実の姿よりは可なり遠ざかつていたということである。又京都の印度学会の『カーマ・ストラ』は・・・学問的価値は前者より遙かに多いが、内容はなお不完全で難渋な個所が相当あつたということである。最近ではリヒャルト・シュミット教授の独訳からの翻訳が出ており、用語、書き方も極めて平易に書いてあるから、それだけに折角の古典の味を失わせ、猥せつの嫌がなしとしない(『完訳カーマ・ストラ』岩本裕訳著)。それに比べると印度学会の『カーマ・ストラ』は叙述が難渋であるだけに猥せつ感は殆どなく却つて、性愛教科書である原典の趣きを伝えているものと思われる。(139頁)等と記した上で、「結論として、本書 = 『カーマ・ストラ』: 筆者註] は性科学書と言わんよりも、印度文化史上の古典として取扱うべきもので、その中にあらわれた古語や古い慣習の解説程度に止めて置くべきものと思う。(140頁)と結んでいる。馬屋原氏には岩本¹⁹⁴⁹が、独訳Schmid^[1897/1900]等からの重訳のように理解されたようなのが誠に興味深く思われる。

- (45) 背表紙、扉には「ギリシャの芸術」と表記されているが、写真版の後の中表紙と奥付には「ギリシャの美術」となっている。図書館等のデータとしては、書名「ギリシャの美術」として別タイトルとして「ギリシャの芸術」「ギリシャの藝術」が上がっている。
- (46) この大隅 [1927c] は、泉 [1927d] と同一の「世界奇書異聞類聚」の一巻である。大隅氏はその訳書冒頭の「サフォー」の底本に関して、「昭和二年十二月九日」の日付のある「序」の中で、次のように記している。「・・・希臘原本から伊太利訳した本書のテキスト *Le aventure di Sapho, poetessa di Mitylene, traduzione dal greco, del cervello V. A dimorante in Roma* の文派(ママ)が如何にも古代の純朴な味ひに満ちホメーロス、ヘロドトスの作風さへ惚ばれひきつけられるものだ。よつて本書の底本となし自由訳を試みた。玉を瓦とした譚は勿論まぬかれぬ。(2-3頁 泉 [1927d] については金沢 [2005] 註(36)で触れたが、両訳者の翻訳姿勢に共通性が見られるのは、それがその叢書の方針だったと考えるべきであろう。その書影などは米沢 [2002] 186頁に掲げられていて参照可能であるが、大隅 [1927c] に関しては、谷口 [2002] という興味深い論考がある。ウンベルト・エーコの翻訳・紹介者などとしても高名な谷口勇氏は、大隅為三訳「サフォー」に関して、訳の底本についての考証を含め、かなり詳細に検討を加えている。また谷口氏はその大隅訳「サフォー」がわが国における従来の「サフォー」研究などでも看過されていることを指摘する(195頁)他、大隅氏の翻訳の手法に関して、「幾分、恣意的解釈もないわけではないが、決して容易ではないイタリア語原文を十分に咀嚼した上で、適時に感情移入的な文言を加えたり、漢語調を生かしたりして、換骨奪胎の妙を発揮し、翻案的な境地に到達している。それにしても、大隅はどこでこの原文を入手したのであろうか。(191頁)と記している。さらに結び近く、谷口氏は、「要するに『サフォー』は一種の「教養小説」(Bildungsroman)なのであり、どういうコンテキストで我国にこれが紹介されるに至ったのかは未詳だが、昭和初期に語学の天才によって早くも導入されたことに驚きを禁じ得ないのである。(192頁)とまで大隅氏を評価しているのである。この訳書に十二年も先立って本邦初訳の『カーマ・ストラ』を世に送った大隅為三氏に対しては、やはり谷口氏と同様の讃辞を送ってもおかしくはないと考える。それにしても大隅為三氏は、どこで『カーマ・ストラ』の仏訳原文等入手し、どういう経緯でこれを刊行することになったのであろうか? その若干については本稿本文にて論じてみたい。なお、本文末尾に「(19 settembre 1998)」とある谷口 [2002] は、大隅氏を大隅 [1927] の訳者としてのみ言及するだけであることを付記しておく。
- (47) 大隅為三氏は、本邦初出の『カーマ・ストラ』の訳者として言及される場合は、「美術評論家」と紹介されることが普通であるが、この『あまとりあ』誌所載の論文の末尾には、「風俗研究家」との付記がある。
- (48) 本稿に先立つ金沢 [2005] にも、誤記・誤植・誤解の類は数多く見出される。取り敢えず、誤記・誤植に関してだけ、【正誤表】を出しておきたい。
- | 金沢 [2005] の正誤表 | 誤 | 正 |
|----------------|---------------------|---------------------|
| 450.26 | 2000,Tokyo. | Tokyo,2000. |
| 443. 8 | 『完全な結婚』 | 『完全なる結婚』 |
| 442.32 | Fr > JpTrNo.1/Tokyo | En > JpTrNo.1/Tokyo |

432. 6	【Lamairese】	【Lamairese】
416.13	六十四詩節	六十詩節
409.29	Litteratur	Literatur
406.17	京都 ⁷⁷	京都 ⁽⁷⁷⁾
402.19	解題	改題
400. 3	CHAPATER	CHAPTER
388.28	阿野 ¹⁹⁶⁶]	阿能 ¹⁹⁶⁶]
385.35	ものではない。	ものではない。

- (49) 戦後次から次へと発行されたカストリ誌の一つ『チャンス』誌の創刊号「性書ダイジェスト」特集号に掲載された相良武雄氏によるもの。「愛情の表現であるその接吻や抱擁に就いて、古代印度の宗教的性典『カーマーストラ』は次の如く述べてある。(47頁)として始めている。末尾に「意を尽くせぬのを憾みながら、その探求の権威ある貴い一編より抜粋。ごく簡略に書き並べたのが本文で、聖典研究会刊行の本間太郎訳を参考とした。(50頁)と典拠を出しているのが注目される。「本間太郎訳」とは本間¹⁹⁴⁸]であるが、この本間¹⁹⁴⁸]は相当に売れたようで、当時の類似書の中でも今日古本市場に最も流通しているようである。なお、カストリ誌の刊行状況を概観するには山本¹⁹⁹⁸]巻末(494-380頁)の「カストリ雑誌・風俗史年表」が便利である。その点数の多さには改めて圧倒される。
- (50) 鈴木辰雄¹⁹³¹]には、興味深い記事が色々載っている。一つは、「談奇作家見立番附」、東の横綱は『秘戯指南』の梅原北明、西の横綱は『らぶ・ひるたあ』の酒井潔、東の大関に『カーマーストラ』のわれらが泉芳 が、東の前頭に『アナンガ・ランガ』の竹内道之助が、また西の前頭に『珍書解題』の黒貞輔があがっている。また、「為御参考」として、行事筆頭に、大隅為三があがっている。もう一つは、「エログロ発禁書見立番附」、西の横綱に『カーマ・スウトラ』、西の大関に『アナンガ・ランガ』、西の関脇に『ラテイラハスヤ』があがっている。もう一つは、談奇黨編集部作成の「最近珍書手帖覚書」。その〈外国之部〉に、「カーマーストラ」と「ラテイラ・ハスヤ」の翻訳についての言及がある(60頁)。もう一つは、「現代獵奇作家版元人名録(71-95頁)に、〈泉芳環〉が立項されていて(73-74頁)、泉芳 についての興味深い記事がある。「嘗つて大谷大学の教授であり、故南條文雄博士の高弟で、(73頁)とあり、「大谷大学は惜しい教授を失つたものだ(74頁)と結んでいる。鈴木辰雄¹⁹³¹]は、昭和6年12月1日発行である。泉芳環氏が大谷大学を退職したのが昭和4年、復職したのが、昭和7年である。「昭和七年六月十五日五版発行」の奥付のある泉^{1931b}]の函の背には、「前大谷大学教授泉芳環著」と印刷されている。
- (51) 作成者は不詳であるが、この月報所載の《インド集》の為の「研究書目・参考文献」に、泉芳環氏の著作他の『カーマ・スウトラ』関連の初期文献がかなりの数が網羅されている。泉芳環氏の名前は、一貫して「泉芳環」と印刷されている。また、泉芳環訳『カーマ・スウトラ』が、やはり『婆羅門神学』となっており発行年が(大12・昭3)とされている。『婆羅門神学』は昭和3年に刊行された田村¹⁹²⁸]のタイトルであって、泉芳環自身の関与しないものである。
- (52) ここには、田中於菟彌氏によって、Kuttanimataの比較的詳しい内容紹介がなされて

いるが、それが同氏による後年のサンスクリット原典よりの全和訳、田中〔1985〕に結実すると考えられるが、サンスクリット原典を踏まえたものではないにしても、かなり充実した松戸〔1952〕のあることは意外に知られていない。

(53) 石川〔1952〕107頁。なお筆者所蔵の花町〔1949〕の奥付には、「翻訳者 花町右門 / 発行者 三宅一朗」とある。石川〔1952〕所載のX・Y・Z氏による「当世ニセ本作り」39頁参照。

(54) 副題に「第二部 第三章 接吻」とあり、末尾に「訳者附記」として、ることからも想像されるが、Liseux〔1885〕の「普及版、八三 八七頁、第二部性交、第三章接吻の全訳」とある。訳者は、前註の通り、仏文学者として知られる三宅一朗氏ということである。なお、筆者の手元にはLiseux〔1885〕に基づく版が三種類あるが、そのうちの、Les Editions Georges-Anquetil版(1926) pp.83-87に一致するようである。

(55) 阿能仁〔1972〕の巻頭1頁に置かれた、「昭和47年1月11日」の日付のある原三正氏による「序」の冒頭部を参考までに引いておきたい。「大塚葉報に推薦した関係上著者のご依頼で、序文めいたものを書く羽目となった。著者とは、その著作を通じてかねがねその学殖に敬服していたし、文献や手紙を頂いて学恩にあずかることがしばしばであったが、実のところ阿能仁氏とは面識はないのである。したがって、その人となりや経歴については知らないことだらけで、この一文もめくら蛇におじずのたぐいであろう。 / だいいち「アノジン」という筆名は英語のanonym(無名子)からきているそうだが、アノヒトという変名にも通じる。1925年大阪生まれ、50年に阪大理学部を卒えて、現在教職にあると承るほかは筆者にも不明である。秘本を求め異端の書を探り、雑学を志向する点、筆者とも同臭のよしみはあるようである。かつて『男女歡喜伝(ヤブユム)』とラマ教尊像(某誌連載)は識者の注目を浴びたし、本誌に連載の『ラティマンジャリー 全訳と解説』は早速某週刊誌もとり上げて、“静かな人気を呼んでいる”と絶賛を博した。筆者としては、これらを合冊した本書は、インド第4の古典性書の本邦初の全訳である点、文献学的にも、もっと重要視されてよいのではないかと思う。(1頁) いかげであろうか?」序文末尾近くに置かれた「これら十分な資料を駆使しての校証は、宗教学や語学にも堪能な著者の含蓄のほとばしるところであり、その文章も、理学部出身という緻密な頭脳の切れ味のよさを示すものと、ほとほと感嘆させられた次第である。」と共になかなか興味深い評言と言うべきであろう。

(56) 石川〔1952〕127頁。

(57) 石川〔1952〕にX・Y・Z氏による「当世ニセ本作り」という興味深い記事が掲載されている。「ニセ本作りは教育者である。といつたが、その証拠には、このところニセ本製造の大関格のM書房に行つて見ると「教育出版社」という看板は出て居るが、紫とも桃色とも書いてはない。それもその筈、M書房の主人は都立高校PTA会長である。こゝの発行者にされている豊久吉造とは架空の人物だが、筆者はたいてい松戸淳、即ち平野威馬雄のことである。彼の住いが千葉県の松戸だからとは案外素直なペンネームだ。(38頁)

(58) 現在もお継続中の松山俊太郎氏のこの連載論文にも『カーマ・ストトラ』等のインド性愛学文献の部分訳、及び言及を散見するが、これに関しては稿を改めて紹介したい。

(59) 【付記】に記した村井市郎氏よりの最新の私信にて、「・・・本の内容はインドの性文

化や性愛術等を広範に解説して、カーマシャーストラ文献も、カーマーストラ等はもちろん、SchmidtのBeiträgeにも出て来ない様な幾つもの文献の解題もされています」と御教示いただいた文献。幸い直ちに入手してざっと一読したが、村井氏の言われる通り、本研究にとって重要な日本人の日本語による研究書である。これを見過ごしたのは筆者の不明でお恥ずかしい限りである。著者の渡部氏はその奥付《著者略歴》によれば、明治35年、「1902年 東京生まれ」(田中於菟彌先生と同年)、「1924年 専修大学商科卒」、「1934年 黄檗学院においてインド哲学研修。1940年 印度 ビスワヴァティ大学哲学科卒」とある。「専攻 インド哲学」、「現在 エリザベス・セミナリを経てセント・アントニオ・セミナリー教授」とある。同書の「第九章 インドの性愛文献考」において、種々インド性愛学文献を解題している。詳細に関しては別稿に譲るが、『カーマ・スートラ』の解題に於いては「日本には信頼のおける『カーマ・スートラ』の翻訳は一冊しかありません。」(211頁)として岩本[1949]に言及している点だけを今は紹介しておきたい。

【付記】責了直前に村井市郎氏より手紙(3月9日付け)が届き、貴重な情報もたらされた。詳細については次回に回さざるを得ないが、筆者にとってもっとも気がかりで本稿註(28)でも言及した「40種」の内実に関する村井氏の御教示だけを簡単に紹介しておきたい。「……一応私の蔵書や出版情報のメモ書きを元にしております。もっともカーマーストラとか愛経とか娑羅門経などの標題語を含んでいると考えられる限り、抄訳や部分訳等も含めての数で、愛経だけの単行本だけでなく、他の作品と合収のもの、従って定期?刊行物所載のものも含めて数えたと思います。」これを拝見して筆者の胸の内は幾分か和らいだ気がするが、金沢 2005 丁で触れていない資料について少なからず色々具体的に御教示をいただいた。それらのあるものに関しては本稿で既に言及しているが、それ以外のものに関しては、次回に改めて紹介したい。だが、例え掲載雑誌名を御教示いただいても、簡単には実見出来ないものばかりである。気長に涉猟を続ける他ないと観念した次第。それにしても、ご体調が優れない中で、資料の複写などを含め長文のお手紙によって懇切を尽くした御教示を賜ったこと、心より感謝申し上げたい。(2006.3.13)